

南房総市岡町遺跡

—広域営農団地農道整備事業（安房2期地区）埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成30年3月

千葉県教育委員会

みなみ ほう そう し おか まち い せき
南房総市岡町遺跡

— 広域営農団地農道整備事業（安房2期地区）埋蔵文化財発掘調査報告書 —





SI005 出土遺物



SI005 出土土馬

序 文

いにしえより温暖な気候に恵まれた千葉県には、先人たちの生活の痕跡などが埋蔵文化財包蔵地（遺跡）として数多く残されています。これらの埋蔵文化財は県民共有の財産として、地域の歴史や文化の解明に欠かすことのできない貴重なものです。

千葉県教育委員会は、埋蔵文化財の調査研究・文化財保護思想の普及などを目的としたこれまでの諸活動に加え、平成 25 年度から千葉県が行う開発事業にかかる発掘調査や調査成果の整理、報告書の刊行について直接実施することとしました。

本書は、千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告第 27 集として、広域営農団地農道整備事業（安房 2 期地区）に伴って実施した南房総市岡町遺跡の発掘調査報告書です。調査では、縄文時代から平安時代に至る遺構・遺物が検出されました。中でも平安時代の竪穴住居跡から安房地域では初の発見となる土馬や多量の土師器が出土したのをはじめ、海岸平野における集落跡の一端を知る上で貴重な成果が得られました。

刊行に当たり、本書が学術資料としてだけでなく、郷土の歴史に対する理解を深めるための資料として多くの方々に広く活用されることを期待しております。

最後に、発掘調査から整理作業を通じ、地元の方々をはじめとする関係者の皆様や関係諸機関には多大な御協力をいただきました。心から感謝申し上げます。

平成 30 年 3 月

千葉県教育委員会
文化財課長 萩原 恭一

凡　例

- 1 本書は、千葉県農林水産部安房農業事務所による広域営農団地農道整備事業（安房2期地区）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 本書は、下記の遺跡を収録したものである。
岡町遺跡 南房総市富浦町南無谷175-2ほか（遺跡コード243-003）
- 3 発掘調査から報告書作成に至る整理作業は、千葉県教育庁教育振興部文化財課が実施した。
- 4 調査組織及び発掘調査と整理作業の期間・担当者等は、第1章に掲載したとおりである。
- 5 本書の執筆は、第2章第1節の縄文土器を安井健一、他は伊藤智樹がを行い、編集は伊藤が行った。
- 6 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県農林水産部耕地課、千葉県安房農業事務所、南房総市教育委員会、（公財）千葉県教育振興財團、今泉潔、岡山亮子、小高春雄、野尻夏姫、栗田則久、越川敏夫、郷堀英司、酒匂喜洋、笠生衛、橋本勝雄は多くの方々から御指導、御協力を得た。
- 7 本書で使用した地図の座標値は、日本測地系に基づく平面直角座標で、図面の方位はすべて座標北である。
- 8 本書で使用した地形図は下記の通りである。
第1図 南房総市発行 1/2,500
第2図 国土地理院発行 1/25,000 地形図「那古」平成16年
- 9 図版1の遺跡周辺航空写真は、京葉測量株式会社が平成28年に撮影した2016_C54_22482を使用した。
- 10 土層、遺物類の色調等の表記に当たっては、小山忠・竹原秀雄1999『新版標準土色帖』（財）日本色彩研究所を参考にした。
- 11 挿図に使用したスクリーントーン・記号等の用例は、下記のとおりである。また、赤彩された土器は赤色で、須恵器は断面を黒色で表現し、それ以外は挿図に明示した。

 遺構内焼土及び被熱範囲

 土器黑色処理

本文目次

第1章 はじめに.....	1
第1節 調査の概要.....	1
1 調査の経緯と経過.....	1
2 遺跡の位置と歴史的環境.....	1
3 調査の方法と調査概要.....	5
第2章 検出された遺構と遺物.....	7
第1節 縄文時代.....	7
1 土坑.....	7
2 グリッド出土遺物.....	7
第2節 弥生時代.....	11
1 グリッド出土遺物.....	11
第3節 古墳時代～平安時代.....	12
1 壓穴住居跡.....	12
2 壓穴状遺構と土器集中箇所.....	24
3 土坑とピット.....	29
4 溝.....	31
5 グリッド出土遺物.....	37
6 製鉄関連遺物.....	39
第3章 まとめ.....	43
写真図版	
報告書抄録.....	卷末

挿図目次

第1図 岡町遺跡の位置と周辺の地形.....	2	第10図 弥生時代グリッド出土土器.....	12
第2図 岡町遺跡と周辺の遺跡.....	4	第11図 S1001A・B	13
第3図 グリッド配置図.....	5	第12図 S1001A出土遺物	14
第4図 基本土層図.....	5	第13図 S1002-003	15
第5図 岡町遺跡全体図.....	6	第14図 S1002-003出土遺物	16
第6図 SK001	7	第15図 S1004と出土遺物	17
第7図 縄文時代グリッド出土土器（1）.....	8	第16図 S1005と出土遺物（1）.....	19
第8図 縄文時代グリッド出土土器（2）.....	9	第17図 S1005遺物出土状況	20
第9図 縄文時代グリッド出土石器.....	11	第18図 S1005出土遺物（2）.....	21

第19図	SI005出土遺物（3）	22	第29図	SD004と出土遺物	35
第20図	SI005出土遺物（4）	23	第30図	古墳時代～平安時代グリッド出土土器（1）	36
第21図	SI006・007と出土遺物	25	第31図	古墳時代～平安時代グリッド出土土器（2）	37
第22図	SZ001と出土遺物	27	第32図	古墳時代～平安時代グリッド出土石製品・ 土製品	38
第23図	SZ003と出土遺物	28	第33図	スラグ土壤サンプル採取位置	39
第24図	SZ002・004と出土遺物	30	第34図	製鉄関連遺物	40
第25図	土坑・ピット分布図	31			
第26図	土坑・ピット	32			
第27図	SD001・002・003	33			
第28図	SD001・002・003断面図と出土遺跡	34			

表目次

第1表	製鉄関連遺物観察表	41	第3表	スラグ土壤サンプル分類表	42
第2表	製鉄関連遺物分類集計表	42	第4表	土器観察表	44

図版目次

卷頭図版	SI005出土遺物 SI005出土土馬	
図版1	遺跡周辺航空写真	
図版2	遺跡遠景・調査終了後全景	図版7 SD001・003・004
図版3	SI001A・B・SK001 SI002カマド内遺物出土状況 SI003遺物出土状況 SI002・003・004 SI005遺物出土状況	3B03グリッド遺物出土状況 2A23グリッドスラグ等出土状況 遺構調査風景
図版4	SI005・SI005遺物出土状況 SI006・007・SI007カマド SZ001遺物出土状況	図版8 繩文時代土器（1） 図版9 繩文時代土器（2）
図版5	SZ002・SZ004 SZ003遺物出土状況 SK002・003・004 土坑・ピット	図版10 繩文時代石器・弥生時代～古墳時代土器 図版11 古墳時代～平安時代遺構出土土器（1） 図版12 古墳時代～平安時代遺構出土土器（2） 図版13 古墳時代～平安時代遺構出土土器（3） 図版14 古墳時代～平安時代遺構出土土器（4） 図版15 古墳時代～平安時代遺構・グリッド出土土器（1） 図版16 古墳時代～平安時代遺構・グリッド出土土器（2） 図版17 古墳時代～平安時代土製品・石製品
図版6	SH001・002・003・004・005・006・007 SH008・009・010・011・012・013 SD001・002	

第1章 はじめに

第1節 調査の概要

1 調査の経緯と経過（第1図）

千葉県南部は、温暖な気候に恵まれた条件を生かした果樹や酪農、花卉栽培など、県内有数の農業地帯である。千葉県農林水産部耕地課・安房農業事務所は、これらの農産物や畜産物を安定的かつ安全に輸送し、併せて地域農業の活性化を図ることを目的として、広域営農団地農道整備事業を計画した。この工事の実施に当たり、千葉県館山土地改良事務所長から平成8年4月に「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて」の照会文書が千葉県教育委員会に提出された。千葉県教育委員会では現地踏査の結果を踏まえ、平成8年5月に工事予定路線内に岡町遺跡が所在する旨の回答を行った。この回答を受け、その取扱いについて関係機関による協議を重ねた結果、事業の性格上やむを得ず記録保存の措置を講ずることになった。

発掘調査及び整理は千葉県教育府教育振興部文化財課が実施した。各年度の組織及び担当者・期間・内容は以下のとおりである。

○平成28年度 発掘調査

文化財課長 永沼律朗 発掘調査班長 田井知二

担当者 主任上席文化財主事 伊藤智樹

期間 平成28年7月25日～平成28年11月7日

内容 確認調査 上層 1,075m² / 1,075m²

本調査 上層 890m²

○平成29年度 整理作業

文化財課長 萩原恭一 発掘調査班長 山田貴久

担当者 主任上席文化財主事 伊藤智樹

内容 記録整理から報告書刊行

2 遺跡の位置と歴史的環境（第2図）

岡町遺跡の所在する南房総市は、房総半島南部に位置する。房総半島南部は北側を安房郡鋸南町鋸山から鴨川市に至る清澄山系の山塊によって画され、古くから安房地域と呼称されてきた。南房総市は、富山町・富浦町・白浜町・千倉町・丸山町・和田町と三芳村の6町1村が平成18年、いわゆる平成の大合併により誕生した新しい市域であり、北側は標高350mの富山、337mの伊予ヶ岳、標高408mの県内最高峰愛宕山を擁する嶺岡山系が横たわり、西側は東京湾、東側と南側は太平洋に面している。

遺跡は、東京湾を西に望む標高11m～16mの丘陵上に位置し、南無谷海岸と呼ばれる海岸からは直線距離で約400mの距離にある。遺跡の乗る丘陵地は、背後に迫る標高40m～80mの山塊の裾部に当たり、その縁辺は段丘状の地形となっている。調査地点はこの段丘面上に立地しており、眼下を東から西側に蛇行して、旧富山町との境、木の根岬付近に源を発する新田川が流れ、東京湾に注いでいる。また新田川を挟んで東側の丘陵端をJR内房線がほぼ南北に走っている。南無谷地区は、海岸と背後の山塊の間に開けた集落で、海岸部を走る国道127号線に沿って商家や民家、寺社等が軒を連ねている。なお、南無谷の地名は、



第1図 岡町遺跡の位置と周辺の地形

(1:2,000) 100m

日蓮宗の宗祖日蓮が当地に留まり、法華経の教えを広めたため、村の名が「南無妙法谷村」となり、その名が転じて「南無谷」となったという説が伝えられている。南無谷地区から南は、山塊が海岸部に迫る地帯を経て、岡本川下流域に形成された平野部が館山市域へと続いている。

富浦地区の遺跡の多くは岡本川下流域の海岸平野、大房岬付近の海岸部に点在している。旧石器時代、縄文時代、弥生時代の遺跡は数少なく、古墳時代後期以降に増加している。旧石器時代では、大房岬遺跡は剥片が採集されている程度である。縄文時代では深名遺跡、大半津遺跡、仲尾川貝塚がある。深名遺跡では昭和60年に町道建設に伴い発掘調査が行われた(深名瀬島遺跡)。この調査では、中期の勝坂式期~加曾利E式期の堅穴住居跡41軒、石囲い炉、理発炉、石鏡315点、石斧62点などをはじめ、大珠や石棒・石皿など多種多様な石器群が出土している。土器群の特徴は、東京湾を挟んで西側の神奈川県域の様相に類似することが指摘された。大半津遺跡では長さ90cmの大型石棒が発見されている。仲尾川南遺跡では早期(子母口式~茅山式)・前期(関山式)の土器片が採集されている。

弥生時代では向原遺跡で橋の付け替え工事の際、壺型土器2点が発見されている程度で調査歴は少ない。古墳時代から平安時代では集落跡の実態に乏しいが、包蔵地が本遺跡周辺及び岡本川流域の平野部に点在する。本遺跡周辺では同じ段丘面上に駒込遺跡、上ノ坪遺跡、御園遺跡があり、岡本川流域では青木遺跡、吉田遺跡、上前田遺跡等が平野部に存在している。その一方、丘陵部では小河川沿いの谷津に面した山陵の裾に横穴墓が盛んに造営されるようになる。特に豊岡付近では汐入川流域に大谷横穴群10基を含めて10群約40基の横穴墓が密集して存在する。開口部や壁面の崩落により詳細不明の横穴墓が多いが、大谷横穴群では撥形の平面形状でアーチ形の天井部を持つ横穴墓が確認されている。

奈良時代以降は安房国となる。富浦地域の海岸部は安房国平群郡達良郷に当たる地域と見られている。安房国は、718(養老2)年5月に上総国から平群・安房・朝夷・長狹の4郡を割いて分立した。その後、741(天平13)年12月に上総国に合併されるが、757(天平寶字元)年5月に再び上総国から分立されるという経緯を辿った。

中世から近世にかけては、戦国時代以降里見氏の活躍する舞台となる。本遺跡から南約1kmの距離には里見義頼・義康の二代の本拠であった岡本城跡がある。丘陵と尾根、海岸部を巧みに取り込んだ城城は海城としての性格を有しており、館山市稲村城跡とともに国史跡となっている。岡本川左岸の平野から東京湾に向かって突き出た大房岬先端には近世末に大房崎台場が設置され、海防の一端を担った。台場の管理・警備は天保13年の忍藩から始まり、その後会津藩、岡山藩と引き継がれ、安政5年に廃止となった。

参考文献

富浦町教育委員会『千葉県富浦町深名瀬島遺跡調査報告書』富浦町教育委員会 昭和62年

富浦町教育委員会『富浦町史』昭和63年

富浦町教育委員会『千葉県安房郡富浦町埋蔵文化財分布地図』平成元年

千葉県教育委員会『千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書Ⅱ』平成8年

(財)千葉県文化財センター『千葉県埋蔵文化財分布地図(4)』平成12年

(財)千葉県文化財センター『千葉県所在洞穴遺跡・横穴墓詳細分布調査報告書』平成15年

(財)千葉県教育振興財團『研究紀要25』平成18年

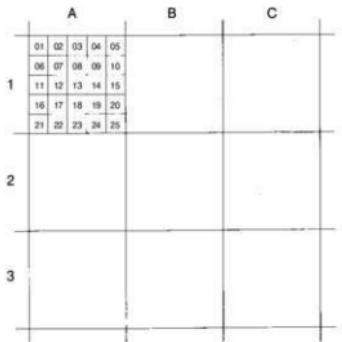
生稻謹爾・NPO法人富浦エコミューゼ研究会『富浦の昔なし第2集』平成18年

(公財)千葉県教育振興財團『研究紀要28』平成25年



館山湾（鏡ヶ浦）

第2図 岡町遺跡と周辺の遺跡



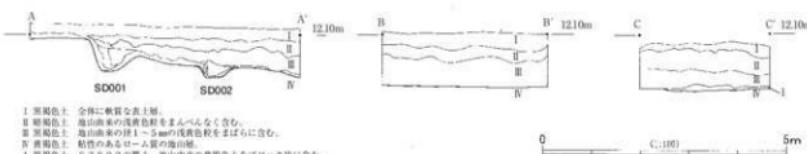
第3図 グリッド配置図

位での遺構検出を目指しながら人力により平面的に掘り下げを行ったが、遺構の把握はなかなか困難であり、最終的には第IV層黄褐色土上面で竪穴住居跡、土坑、溝跡等を確認した。なお、溝SD001・003から東側は、新田川に面した斜面となり、遺構が確認されなかったため、この区域を除く890m²を本調査対象面積とした。

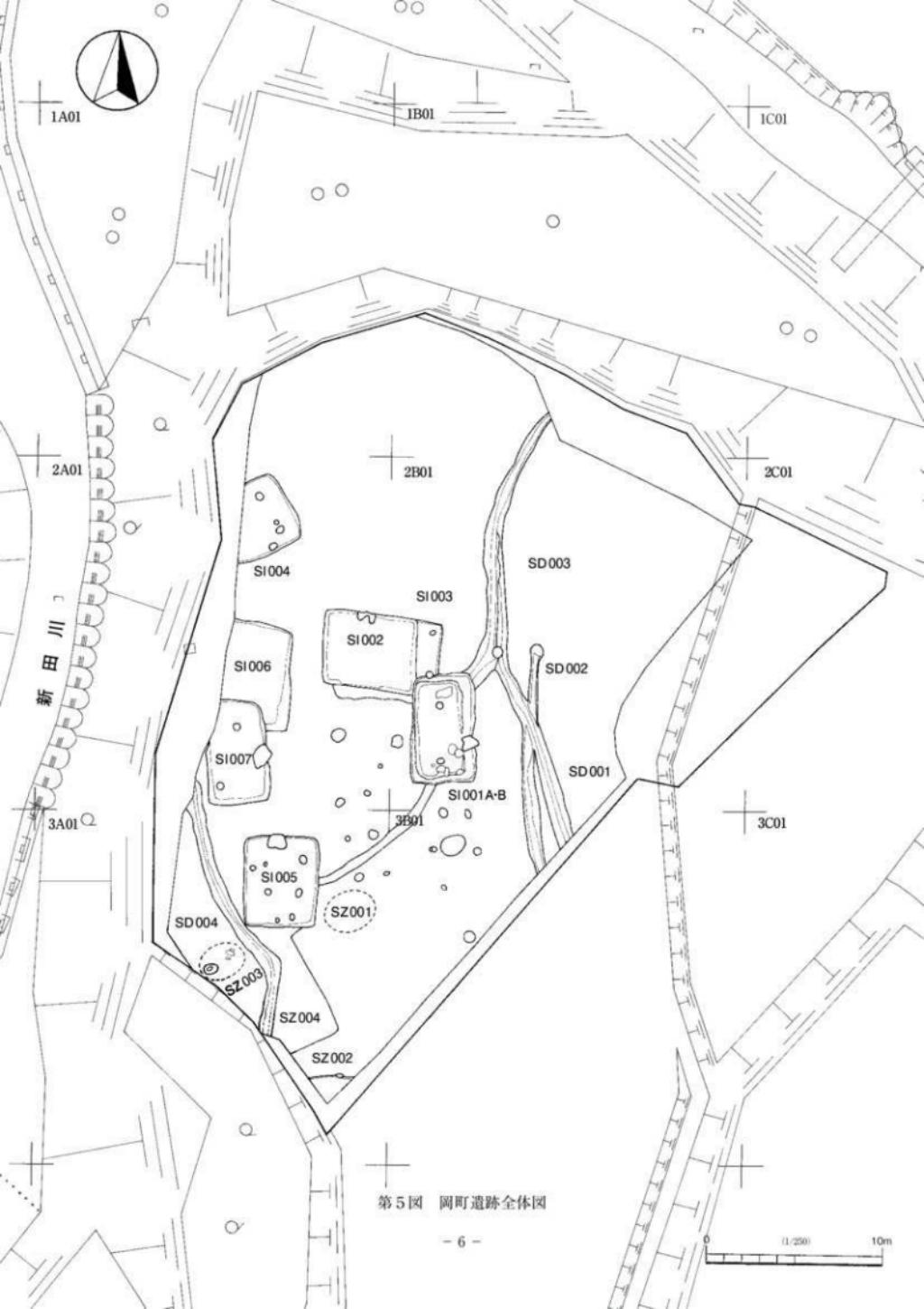
発掘調査に当たっては、調査対象範囲の全域をカバーするように20m×20mを基本とする大グリッドを西から東へA・B・Cの3列、北から南へ1・2・3の3段に区分し、さらに大グリッドを4m×4mの小グリッドで25分割し、北西隅から東へ01、02・・・05、南へ01、06・・・21とした。小グリッドは、北西隅の小グリッドからIA01・1 A02・・・と呼称した。

遺構の調査に際しては、竪穴住居跡=S I、土坑=S K、溝=S D、性格不明の遺構及び遺構を伴う土器集中箇所=S Z、ピット=Pの記号を付して遺構番号とした。なお、報告にあたって、ピットはS Hの記号に変更している。

調査の結果、古墳時代及び平安時代の竪穴住居跡8軒、性格不明の竪穴状遺構2棟、土坑4基、ピット13基及び土器集中箇所3か所を検出した。中でも平安時代のSI005では、多量の土師器とともに土馬が出土し、安房地域における初の発見となった。また、その他縄文時代晩期末の土器群や平安時代の製鉄関連のスラグ類など、特筆されるべき遺物も出土している。



第4図 基本土層図



第5図 岡町遺跡全体図

第2章 検出された遺構と遺物

第1節 繩文時代

1 土坑

SK001 (第6図、図版3・8)

本土坑はSI001Aの西側、2B16・21グリッドにまたがって位置する土坑である。平面形はほぼ楕円形で、長軸を北に向ける。土坑の規模は長軸0.74m、短軸0.60m、深さ約20cmである。遺構確認面は地山の黄褐色土上面である。覆土は黒褐色土を主体として自然堆積の状況を示していた。底面はすり鉢状である。遺物は、覆土中から1、遺構確認時に2が出土している。土坑の時期は縄文時代晩期の所産と考えられるが、性格は不明である。

1は浅い沈線文が施されるもので、深鉢もしくは壺形土器の胴部である。2本の沈線が横位及び斜位に配され、三角連繋を構成すると思われるが、小破片のため詳細は不明である。2は条痕文が施されるもので、深鉢もしくは壺形土器の胴部下半である。

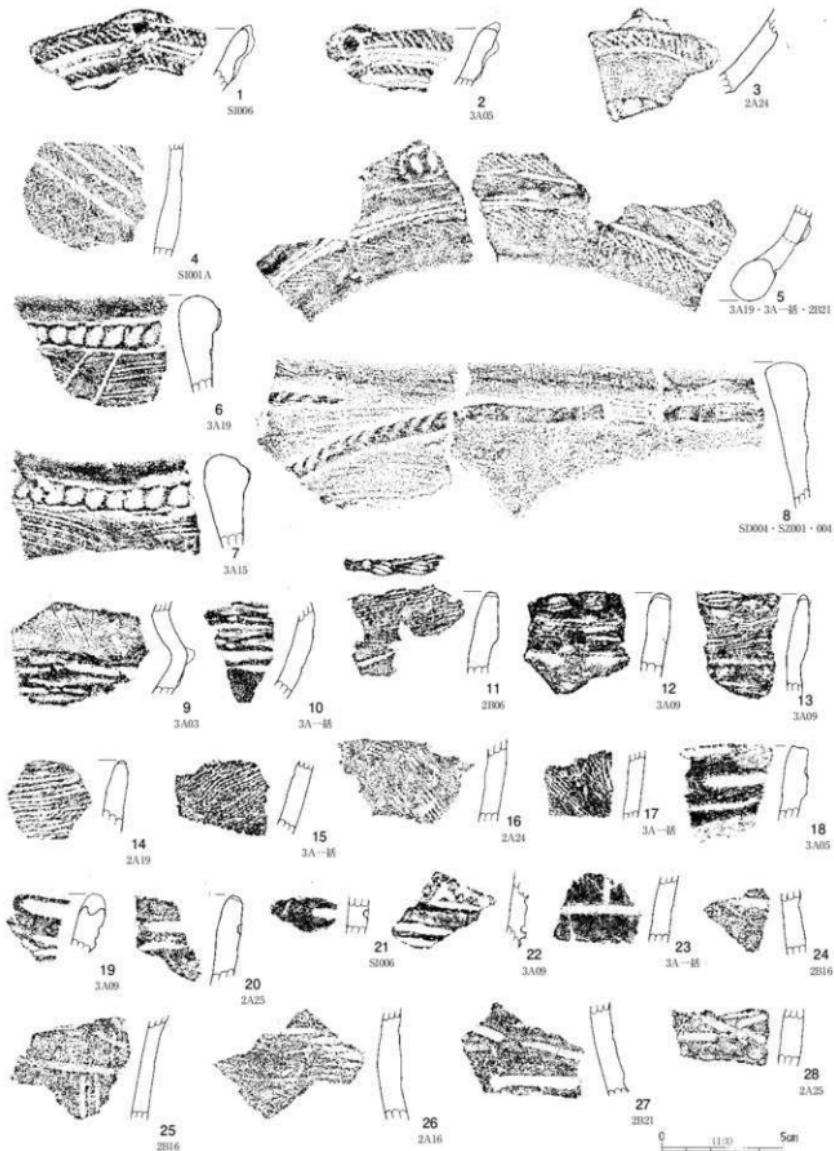
2 グリッド出土遺物 (第7~9図、図版8~10)

グリッド出土遺物として、土器と石器をまとめて掲載する。なお、土器は縄文時代として記載したが、一部弥生時代の土器も含まれていることを断っておく。

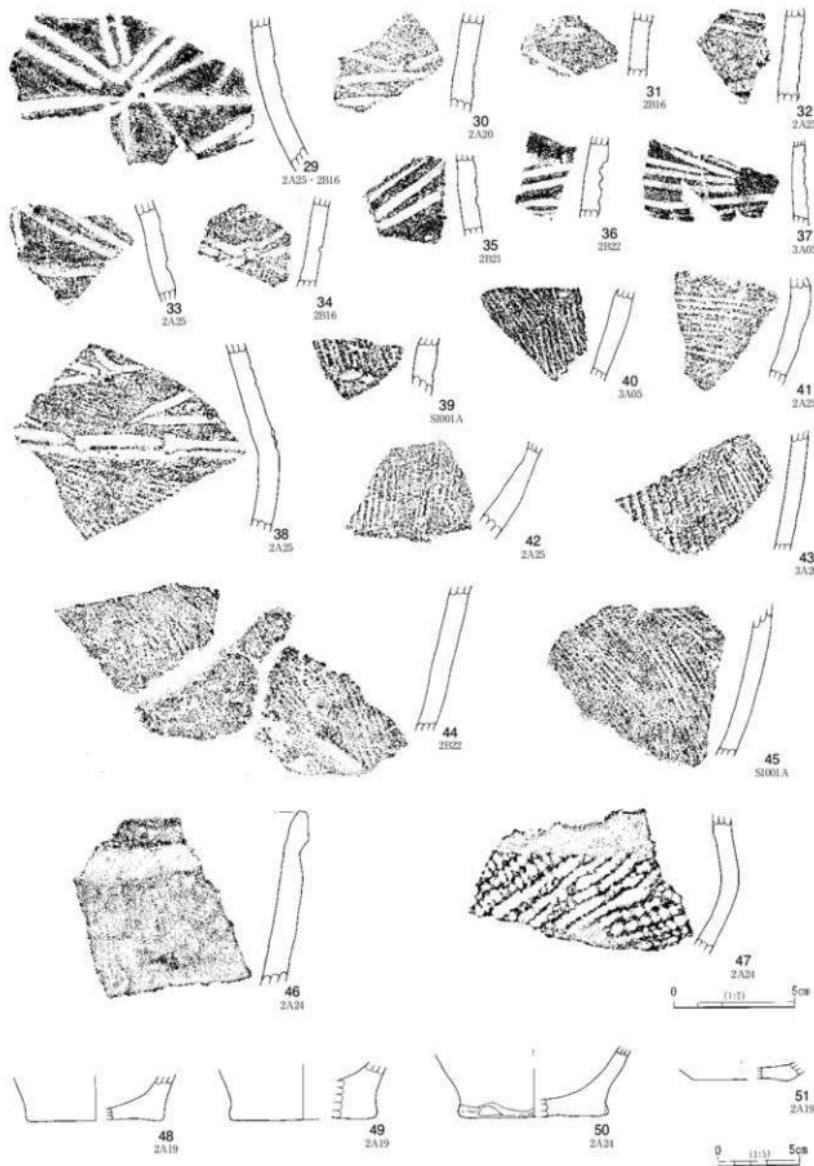
1~8は後期後葉から晩期前葉の資料である。1~3は同一個体の浅鉢である。器面は磨耗しているほか、特に2は熱を受けている。3の右端は帶縄文がやや上側に突出しており、口縁部小突起の直下と考えられる。以上は安行1式に比定される。4は角形土器と考えられるものである。全體に板状であるが、右端の内面は強く湾曲しており屈曲する辺の部分と考えられる。右下は突起が剥落した痕跡があり、角底の隅と考えられる。時期決定は難しいが、斜位に配される沈線の施用具は尖頭状でしっかりとおり、磨耗しているものの沈線間に縄文が施されているのが認められることから、安行3b式の可能性が高いと考える。5



第6図 SK001



第7図 縄文時代グリッド出土土器（1）

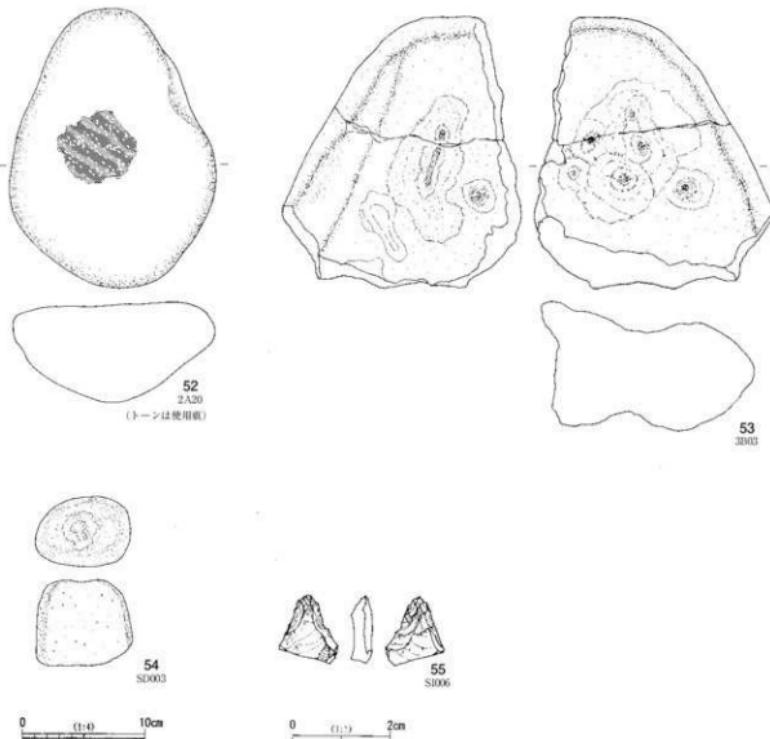


第8図 縄文時代グリッド出土土器（2）

は台付土器の台部である。帯縄文の肥厚はしっかりとし、平行する沈線も尖頭状工具が使用されしっかりと施文されており、安行3a式に比定される。6～8は該期の粗製深鉢である。8は磨耗が著しく、肉眼では条線がほとんど見えない。

9～47は晩期後葉に位置づけられるものである。9・10は浅鉢もしくは鉢で、胴部下間に浮線文が配される。11～17は粗製深鉢である。11～14は口縁部で、口縁に沿って横位の撚糸文が施され口唇上には原体が圧痕される。11～13は折り返し口縁で、14もおそらく折り返し口縁であろう。15～17は胴部で、節の細かい撚糸文が施される。以上は千網式に比定される。18～22は深い沈線文が施されるものである。18～20は深鉢もしくは菱形土器の口縁部で、18は折り返し口縁となっており、19には小突起が付けられる。いずれも口縁に沿って横位の沈線が配され、口唇上にも沈線が施される。23～38は深い沈線文が施されるものである。いずれも器面が磨耗しており文様がはっきりしないが、横位の沈線によって段を構成し、三角連繋もしくは菱形連繋が配されるものと思われる。34は菱形を構成する沈線の中心に刺突を配している。35～37は比較的遺存度が良好で、3本以上で組になった沈線が横位あるいは斜位に配される。特に36は沈線そのものも角棒状工具を使用しており、他の資料に比べ線が深く輪郭も明瞭である。直上はやや肥厚しており口縁直下かもしれない。38は上半部に沈線文、下半部に条痕文が施されるものである。SK001出土の1と胎土が類似する。両者の境に2本一組の横位沈線が配され、上側の沈線には等間隔で刺突が配される。39～45は条痕文が施されるもので、いずれも深鉢もしくは菱形土器の胴部である。ただし器面の磨耗が顕著でわかりにくく、40は撚糸文かもしれない。44はSK001出土の2と同一個体と思われる。以上は荒海式に比定される。そのうち18～22と35～37は沈線が深く明瞭であること、胴部破片についてはモチーフが集合化した沈線により描かれており、いわゆる雑書文的な様相を残している。その他の資料は沈線が浅く不明瞭になり、単線化していることなどからより新しい様相を呈していると思われる。前者は荒海2式、後者は荒海3式にそれぞれ比定されると考える。46は無文の深鉢で、口縁直下に幅広のナゾリ状沈線が配される。東海地方の五貫森式の影響を受けた土器と考えられる。47は鉢形土器で、底部から器壁がやや強く外傾し、途中で屈曲して内傾気味に立ち上がる。屈曲部を境として下側に節の大きいLR单節縄文が施され、上側は無文となっている。荒海4式以降のものと考えられる。48～51は底部で、48～50は深鉢もしくは菱形土器、51は浅鉢もしくは鉢である。50は底面側縁に粘土紐を貼り付け裾部を広げており、荒海式の所産と判断される。

52から55は石器である。52は砂岩を利用した磨石で、平坦面の中央に磨り痕が認められる。全体に火熱を受け赤化している。最大長17cm、最大幅12.6cm、厚さ6.1cm、重さ1.66kgである。53は砂岩製の凹石で平坦面の両面に複数の窪みをもつ。最大長16.5cm、最大幅14.5cm、厚さ8.5cm、重さ1.93kgである。54は安山岩の敲石である。頂部の中央に敲き痕が認められる。最大長5.2cm、最大幅5.7cm、厚さ4.3cm、重さ161gである。55は黒曜石の石錐端部である。最大長14.6mm、最大幅12.1mm、厚さ4.1mm、重さ0.65gである。

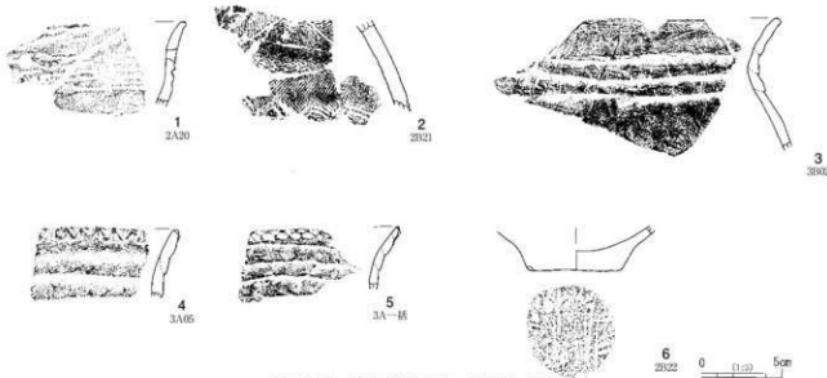


第9図 縄文時代グリッド出土石器

第2節 弥生時代

1 グリッド出土遺物（第10図、図版10）

1は壺型土器の口縁部から胴部である。小さく外反する口唇部から胴部がわずかに膨らむ器形である。口唇部直下と胴部上位に浅い沈線で直線、三角形の文様を描き、三角文の中には鋭い刺突文が加えられる。端部に補修孔が穿たれている。裏面は丁寧なミガキが施される。胎土に細かい砂粒を含み焼成は良好である。中期中葉の須和田式に比定される。2は壺型土器の胴部である。上位は細い沈線と縄文で山形文を描き、下位にS字状結節文、2条の鋸歯文の間に羽状縄文を施している。内面はナデ調整される。胎土に粗い砂粒を含み、焼成は悪く、表面に小さな気泡状の穴が無数に認められる。3～5は口頭部に輪積み痕を有する壺形土器である。3は平縁で表面には条痕のような粗い調整痕が顕著に残っている。4・5は棒状工具による刻みが施されている。いずれも胎土に粗い砂粒を含み、焼成は良い。6は壺型土器の底部である。木葉痕のほか粒状の圧痕が認められる。以上、2～6は後期後半の所産である。



第10図 弥生時代グリッド出土土器

第3節 古墳時代～平安時代

I 堪穴住跡

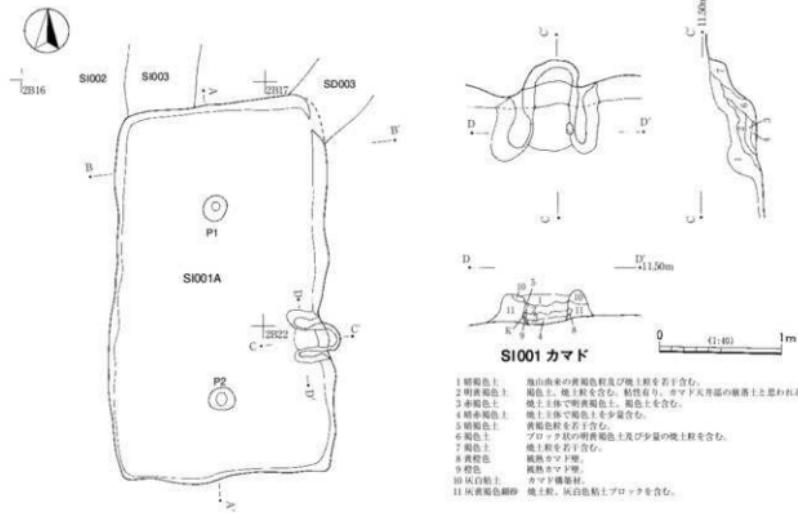
S I O 0 1 A・B (第11・12図、図版3・11・16)

調査区の中央からやや東側、2B16・17グリッドに位置する堪穴住居である。床面精査の段階で内側下層に一回り小型の建物跡が確認され、その上層を貼床層が覆っていたことから、建て替え住居と判断し、外側を新しい住居跡001A、内側を古い住居跡001Bとした。また、北西隅でSI002・003、北東隅と南西隅で溝SD003と重複する。土層断面の検討から、堪穴住居相互の新旧関係は(新)SI001A → SI001B → SI002 → SI003(古)となり、溝SD003は本跡より古い時期に掘り込まれていることを確認した。

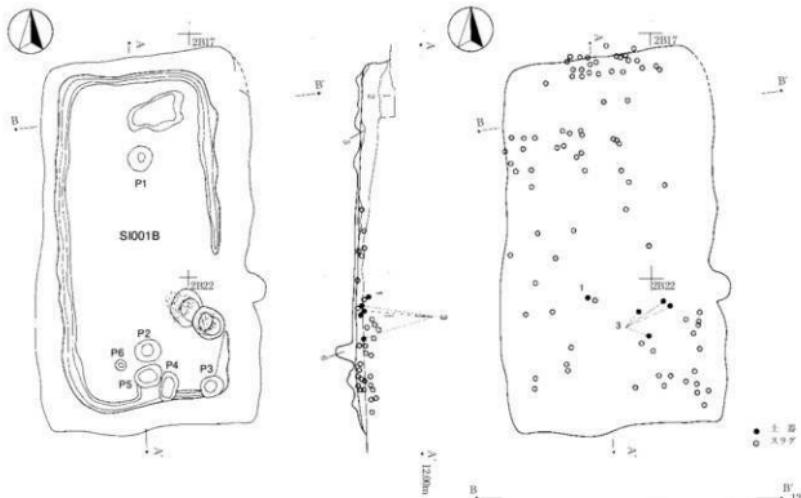
001Aは主軸がほぼ南北方向に向く長方形で、長軸6.17m、短軸3.72mである。カマドを東壁やや南寄りに設けている。壁の状況は遺構検出面の地山が東側SD001・002の付近を境にして傾斜する部分に当たることから、住居跡の北・東壁側の残りが良く、高さ48cm～40cm、反対に西・南壁側で残りが悪く、高さ9cm～2cmという結果となった。床面はやや起伏があり、001Bが重なる範囲は貼床面となっている。主柱穴は長軸線上に2基があり、001Bと共にしている。径が43cm～41cm、深さ36cm～34cmである。カマドは袖部、燃焼部、煙道部が残っていた。袖部は灰白色粘土を主体に構築され、煙道部が壁外に20cm程張り出している。燃焼部は方形で浅く窪む。

001Bは001Aを一回り小さくした長方形で、東側の一部を除いて壁溝が検出された。壁溝外側での規模は長軸5.55m、短軸2.71m、溝は幅30cm～20cm、深さ10cm～3cmである。東側の壁溝が途切れた部分に、カマドの燃焼部と思われる円形の掘方を伴う焼面が2か所存在する。001Aと共に主柱穴のほか、円形の浅いピットが4基、不整形の土坑が1基検出されている。

遺物はスラグと土師器・須恵器が出土しているが土器類の量は少ない。スラグは遺構検出面上層から床面付近まで分布していて、北側の密度が高い。一部は住居外から出土しており、住居廃絶後、時を経て投棄されたと考えられる。スラグについては、第6項で後述する。



- 1 前褐色土
2 明前褐色土
3 暗褐色土
4 前暗褐色土
5 暗褐色土
6 黄褐色土
7 黄色土
8 黑褐色土
9 黑色土
10 黑白色土
11 黑前褐色土
- 1 鹿山由來の黄褐色土及び地土粒子を若干含む。
2 明前褐色土 地色土、地主粒子を含む。粘性有り、カマド灰背部の崩落土と思われる。
3 暗褐色土 地主土で明前褐色土、暗褐色土を含む。
4 前暗褐色土 地主土で褐色土を少量含む。
5 暗褐色土
6 黄褐色土 ブロック状の明前褐色土及び少量の地土粒子を含む。
7 黄色土 地土粒子を若干含む。
8 黑褐色土 灰熱カマド埋。9 黑色土 灰熱カマド埋。10 黑白色土 地主土、地表材。11 黑前褐色土 地土粒、灰白色粘土ブロックを含む。

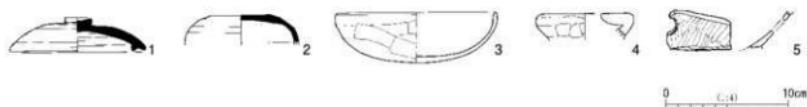


- 1 黒褐色土 黄化粒が若干観察される。スラグ粒を含む。
2 前暗褐色土 淡褐色泥炭粒（15~20mm大）を含む。炭化粒混ざる。スラグ粒を含む。
3 黄褐色土 明顯褐色土を含む。
4 前暗褐色土 鹿山由來の黄褐色土を多く含む。
5 前暗褐色土 地主土を多く含む。
6 黑褐色土 鹿山由來の黑褐色土がブロックに入り、明顯色ブロック、若干の地土粒が混ざる。

SI001Bの覆土であり、SI001Aの張り床層。しまりがあり部分的に堅化した状態。

第11図 SI001A・B

0 1:100 2m



第12図 SI001A出土遺物

1、2は須恵器蓋環である。1は凹形のつまみと返りを有する。天井部を回転ヘラ削り調整、返りはわずかに突出する。2はつまみ、返りを持たない蓋環である。天井部は平らでヘラ削り調整である。环身の可能性も考えられる。3は土師器の环で、カマド前面付近から分散して出土した。外面は全体を手持ちヘラ削り調整、底部が丸く収まる。4は土師器装飾器台の器受け部で円形の透かし孔があく。外面は赤彩されている。5は土師器器台である。炉器台と称している形態で器受け部が鋭く屈曲している。1の須恵器蓋環は袖ヶ浦市雷塚遺跡10号墳で出土している湖西窯産とされる例と器形や法量が近い形態である。時期的には7世紀後半の年代観を与えられていることから、本住居跡も同じ時期の所産と考えたい。なお、4・5の器台類は混入品である。

S I 0 0 2 (第13・14図 図版3・11)

2A15・2B11グリッドに位置する。東側をSI003、南東隅をSI001Aと重複している。新旧関係はSI001Aより古く、SI003より新しい。平面形は東西辺が北に振れる変形の長方形で、規模は長軸5.05m、短軸4.26mである。カマドは北壁中央部に設けられている。床面はほぼ平坦で、カマドから西側と東側に壁溝が周る。また、カマドの周囲は砂質土の硬化面が認められる。壁高は最も残りが良い北壁側で46cm～37cmである。ここも地山面が南に傾斜する場所にあたることから、南壁側は壁溝の一部が検出されただけである。カマドは袖部、燃焼部、煙道が残っていた。袖部は灰白色粘土が主要な部材であるが、右袖は基部の壁面を袖状に削り出した構造で、先端部に直方体の蝶片を心材として使用していた。煙道部は壁面から50cmほど張り出している。なお、柱穴は検出できなかった。

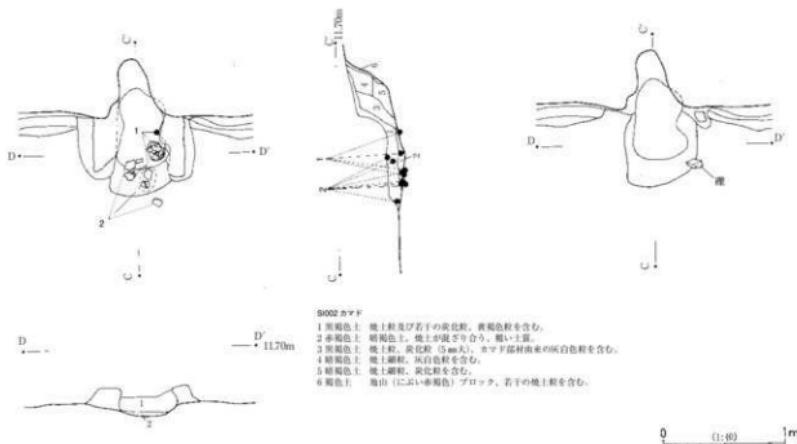
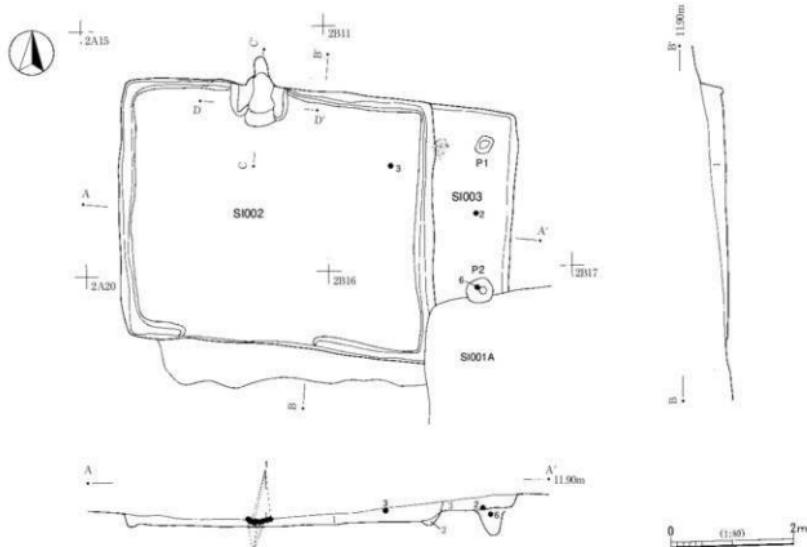
遺物は土師器の破片が大部分で、カマド内に集中して出土した以外は、量的に少なく、散在した状況であった。1は小型の土師器壺で口縁部と胴部の境に弱い稜を持つ。胴部下位はやや粗いヘラ削り調整が残る。また、胎土に径3mm～2mmの石粒が多く混入する。2は壺の胴部から底部となる。全体の形状が不明だが胴部の張りが小さく、長胴タイプになるかもしれない。3は高壺の脚上部で赤彩が施されている。

本住居跡の時期は1の小型壺の形態から、7世紀前半に位置づけられる。

S I 0 0 3 (第13・14図 図版3・11)

2B11・16グリッドに位置し、南側をSI001、西側をSI002に接している。検出された範囲は北壁側から東壁側の一部とSI002の南側に接する床面の一部である。この床面残存部を加えた住居跡の規模は一辺5.5m～5m程度と推定される。遺構確認面から床面までの深さは北壁側から東壁側で39cm～17cmである。東壁に沿った北側と南側でピットが2基検出された。北側のピット1は径27cm、深さ11cm、南側のピット2は径45cm、深さ39cmである。ピット2からは大振りの壺が出土している。SI002に接する北側床面の一部には焼けて赤化した部分が認められた。

遺物は少ない。4は小型壺である。口縁が直線的に開き、屈折して胴部に至る。胴部は小さく張り、底部は少し上げ底状に窪む。内外面とも荒れて調整痕が不鮮明だが、口縁部から胴部中ほどまでミガキ痕が認められる。5・6は壺である。実測図上では復元径に差があることから別々に図示したが、焼成や胎土、器



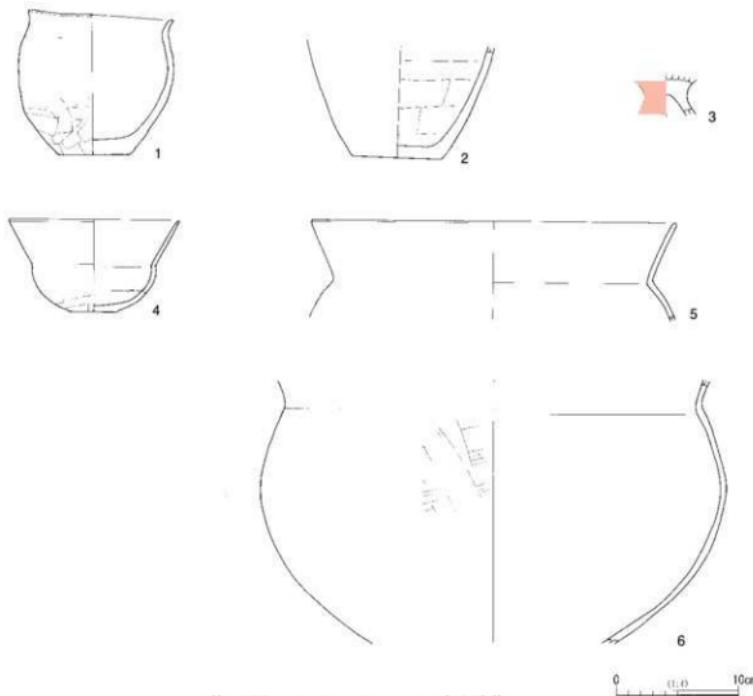
第13図 S1002・003

面調整、厚さが共通することから、同一個体と考えられる。5の口縁部は幅広でわずかだが輪積み痕が残っている。6は大きく張る胴部で推定最大径は38cmとなる。内外面ともナデ調整を施し、胎土に砂粒が多く含まれる。このほか、床面上で礫が5点出土している（図版3）。礫はすべて砂岩で、最大長32cm～20cm、重さ9.3kg～1.5kgである。特段に加工された痕跡は認められなかったが、すべて火熱を受けている。本住居跡の時期は4の小型壙の形態から、古墳時代前期の所産と考えたい。

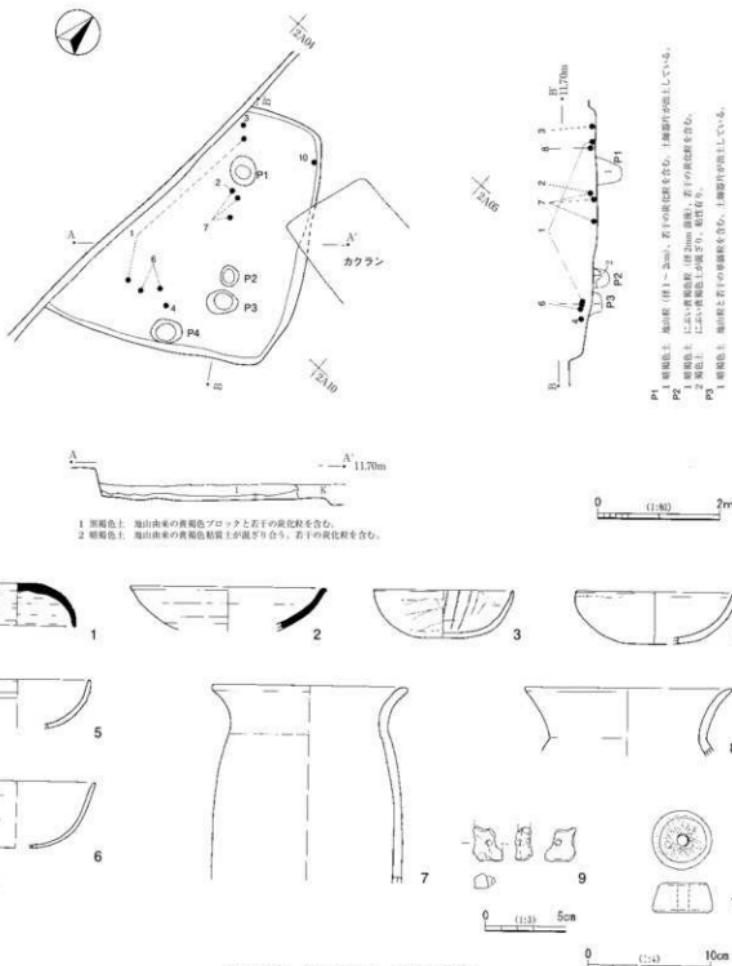
S 1004 (第15図、図版3・11・16)

調査区の北側、2A04・09グリッドに位置している。北壁の一部から西側は崖面で遮られ、調査できなかつた。また、東側の一部は耕作により搅乱を受けていた。平面形は方形になると思われ、南北方向で4.1mの長さである。床面は壁側から住居中央に向かって緩く傾斜し、全体に起伏がある。深さは確認面から34cm～21cmである。柱穴は4基検出した。一直線上に並ぶP1～P3が主柱穴である。P1は径47cm、深さ44cm、P2は径32cm、深さ30cm、P3は径51cm、深さ26cmである。南壁に接するP4は径50cm、深さ22cmである。

遺物の全体量は少ないが、床面上とやや上で出土したものが多く、須恵器・土師器のはか石製紡錘車などがある。1は須恵器蓋環でいわゆる合子状蓋と呼ばれる形態である。天井部と口縁部との境に沈線が入



第14図 S 1002・003出土遺物



第15図 S1004と出土遺物

る。外面口縁部の約1/3は自然釉がかかり、器面が荒れている。この個体は3mほど離れた位置から出土した破片が接合している。2は須恵器高杯の壊部である。口縁部がわずかに外反し、体部で緩やかにすぼまる半球形の形態となる。口縁部上端の形状は丸く収まるが、擦れて平たんな面が表れている。胎土に細砂粒が多く入るためか、器面全体がざらついている。3~6は土師器壊である。体部は概ね丸みをもって立ち上がる形態である。3は内面に輪積み痕を残し、放射状の暗文が微かに認められる。また外面底部は黒色である。4は口縁部端が尖りぎみで、口縁部に輪積み痕が残っている。5は口縁部と体部の境がわず

かに屈曲する。6は器高があり、深めの形態で、口唇部がわずかに屈曲する。7・8は土師器甕である。両者とも胎土に大粒の砂粒を多く含む。7は長胴タイプで口縁部から胴部中位まで残っている。口縁部と胴部の境で弱く屈曲する。調整は口縁部を横ナデ、胴部は器面が荒れているため、不明瞭である。9は用途不明の土製品の一部である。表面は比較的滑らかで、一か所に径3.5mmの孔が開けられている。最大長20.1mm、最大厚8.8mmである。10は石製紡錘車である。滑石製で、上面と底面に放射状の条線が認められる。最大径36mm、重さ4225gである。

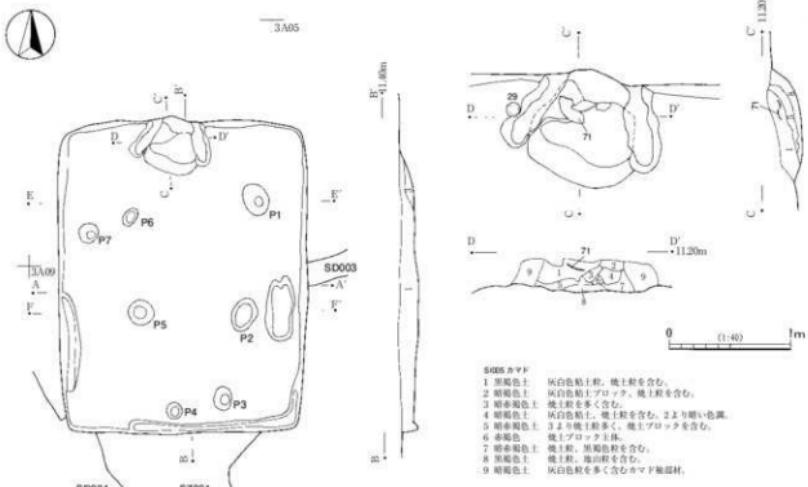
本住居跡の時期は須恵器、土師器の坏類の形態から、7世紀中葉に位置づけられる。

S I O O 5 (第16～20図、巻頭図版、図版3・4・11～14・17)

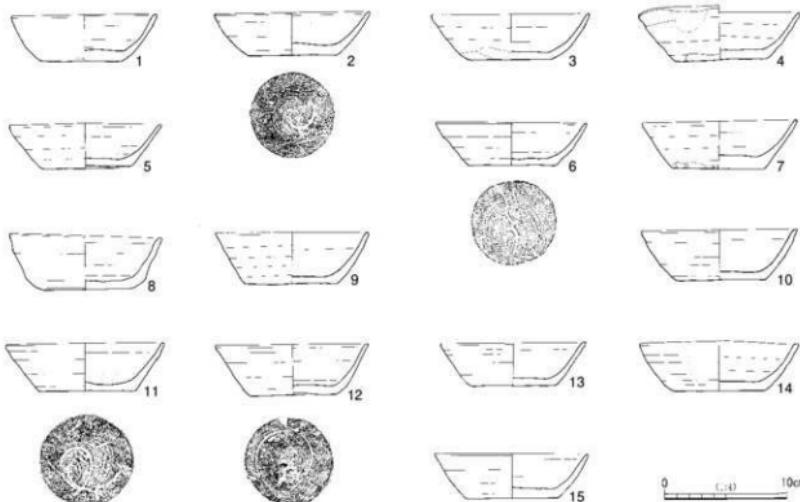
調査区南側、3A04・09グリッドに位置する。平面形は長軸を南北方向にとる長方形で、規模は長軸5.1m、短軸4.13mである。カマドを北壁中央に設けている。床面はほぼ平坦で、確認面からの深さは東側で18cm～13cm、西壁側で28cm～25cmである。壁溝は西壁、南壁の一部で検出されたが、西壁側は深さ4cmほどの浅く窪む程度であった。南壁側は深さ10cmで明瞭な溝が認められた。柱穴は7基検出された。位置や規模が不規則であるが中央寄りにあるP1～P4が主柱穴と考えられる。最大径57cm～27cm、深さ64cm～8cmと幅がある。壁際に位置するP5～P7の規模は最大径38cm～28cm、深さ14cm～9cmである。また、東壁側では不整形の土坑が検出されたが、用途は不明である。規模は長さ1.08m、深さ11cmである。カマドは袖部、燃焼部、煙道部が残っていた。袖部は暗褐色土と灰白色粘土を主要な部材として構築され、左袖側はかなり崩れた状況であった。燃焼部の掘り込みは浅く7cmほど窪んでいる。なお、カマド内堆積土から第20図71の扁平な土師器破片が出土している。

遺物は土師器坏・蓋・皿類や土馬が出土した。土師器類は供膳用土器が多く、かつ完形土器が多いこと、焼成の際に生じたと思しき歪みや割れ、ヒビのある製品が目立つ点も特徴の一つである。出土状況を全体的に見ると住居跡南西側に多く、中央付近から東側は散漫な状況であった。特に南壁から西壁側では土師器蓋坏類が住居壁際から崩れ落ちるような状況で、あるものは斜めに、あるものは逆さまになった状況で出土した。第19図58・59の蓋や第16図11の坏、第18図25・43の坏、第19図54の皿などがそれらに該当する。また床面上には重なったまま（入れ子状）出土した土器も多い。坏類では第16図1・2の2点が西壁側、同図7・6の2点が南壁側で出土した。また、第16図3・4・5の3点と第18図38・40の2点がカマド右側で出土し、これらに接するよう第19図64・65の台付甕2点がやはり重なって出土した。

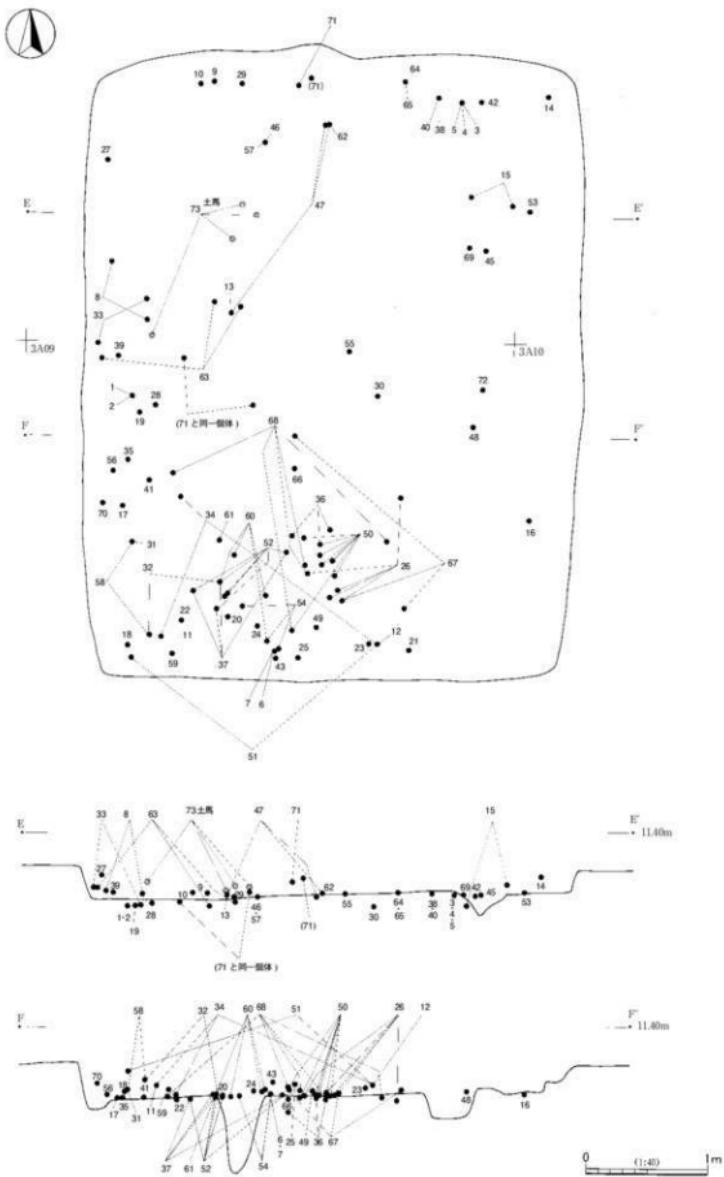
1から52は土師器の坏類である。すべてロクロ成形で、底部調整が分かるもののうち、中央に糸切り痕を残し、周縁をナデ調整するもの19点、底部全面をナデまたはヘラ削り調整するもの32点である。法量は口径12cm～13cm、底径7cm～8cmの範囲に収まるものが大部分である。器形からみると、体部が比較的直線的に開き、口径と底径の差が少ない箱型の類で、底部が比較的厚く持ち重りがする8～15、体部が丸みを持ち、口縁部が外反する16～34、口径と底径ともに大きく、口縁が開く36～45、口径が大きく器高が高く（深い）椀型に近い46～52がある。このタイプは調整が丁寧で52のように内面をミガキ調整で仕上げているものがある。53～57は皿で54・55は削り出し高台である。55は大きく歪み、内面をミガキ調整で丁寧に仕上げている。58～60は凹型の摘みが付く蓋で、内面を丁寧に仕上げている。59は大きく歪み、60もヒビが入る。61・62は有台の椀で、内面にミガキ調整のうえ黒色処理が施される。63～66は台付甕及び台部である。器壁全体が薄く作られている。67・68は甕の破片で同一個体だが接合しない。器壁が厚く、大型になると思われる。68には把手が剥がれた痕が認められる。69も同類の破片と思われ、一条



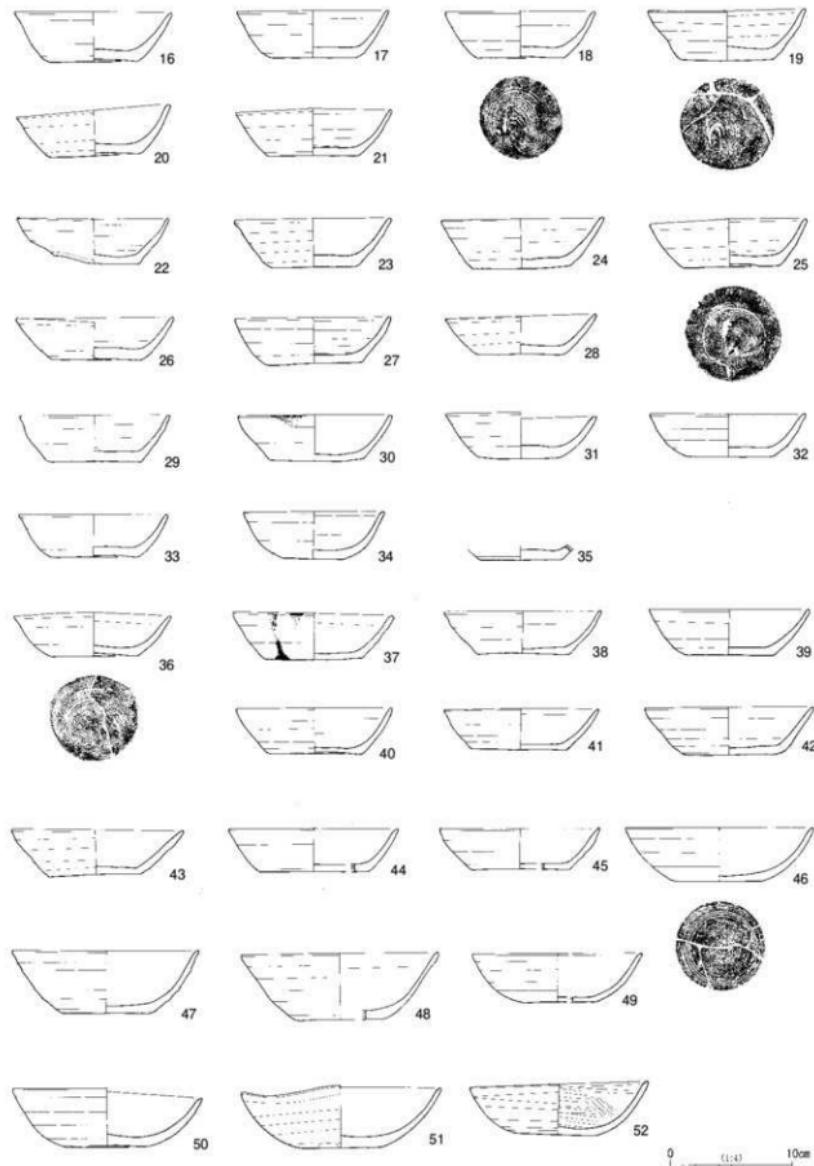
SOGS カマド
 1 黒褐色土色
 2 褐褐色土色
 3 暗褐色土色
 4 带褐色土色
 5 带赤褐色土色
 6 白褐色土色
 7 黄褐色土色
 8 黑褐色土色
 9 暗褐色土色
 10 暗褐色土色



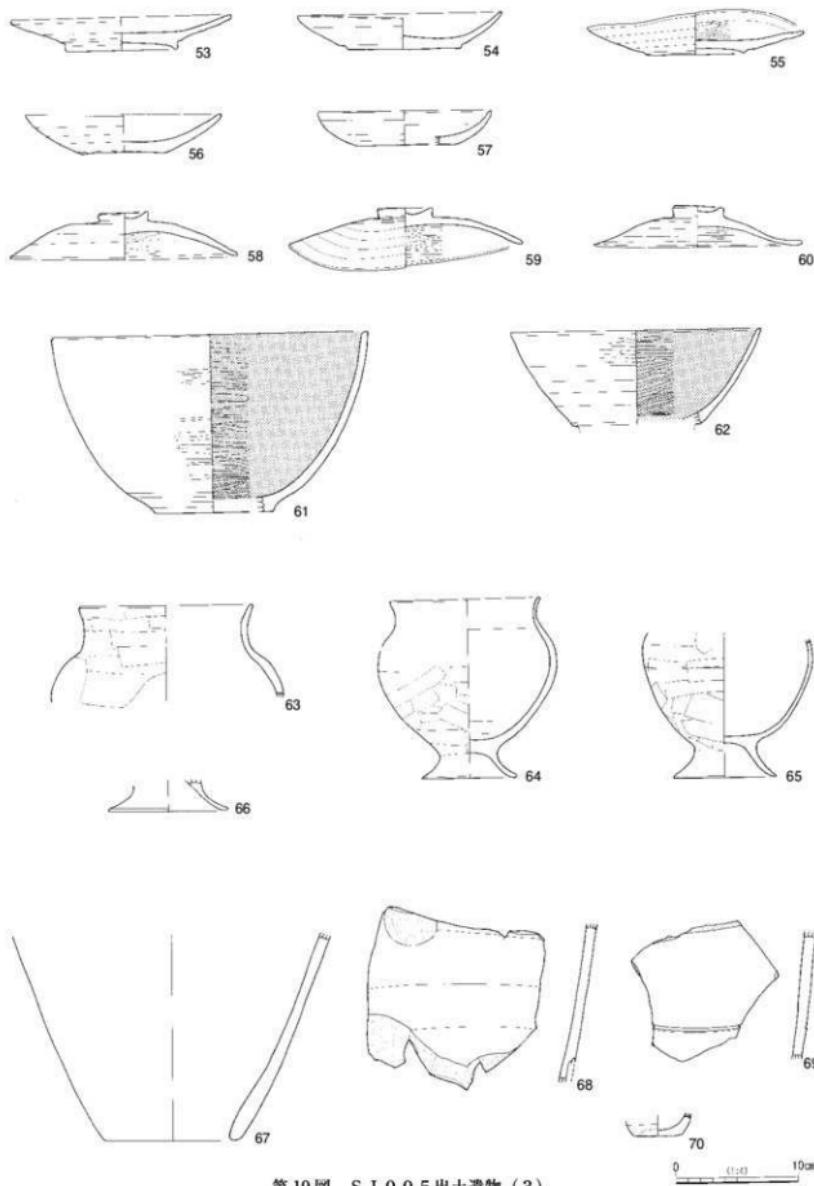
第16図 S I 0 0 5 と出土遺物（1）



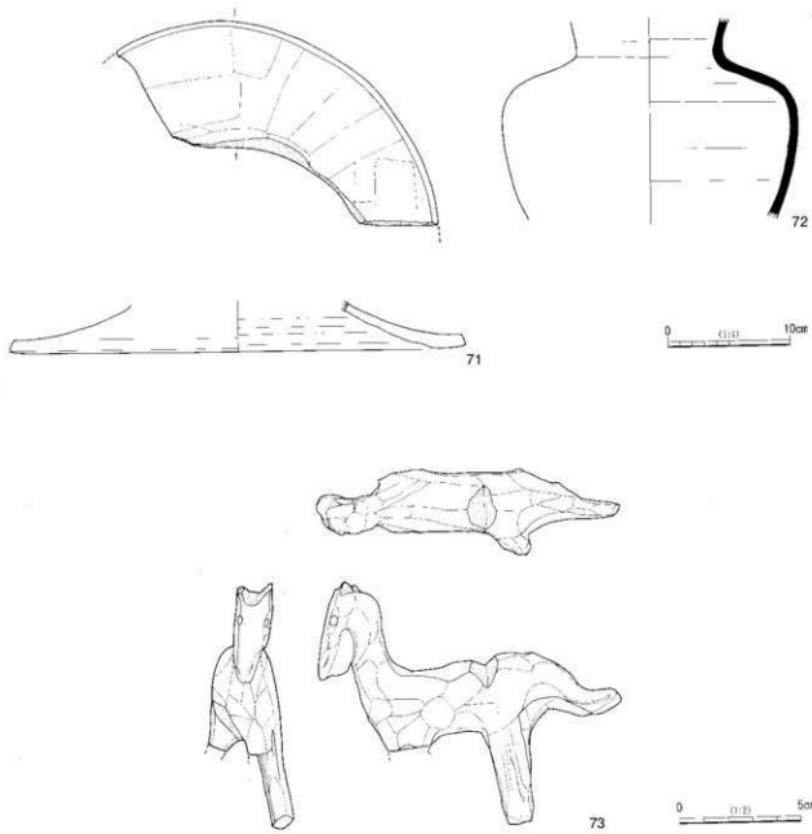
第17図 S1005 遺物出土状況



第18図 S1005出土遺物(2)



第19図 S1005出土遺物（3）



第20図 S1005出土遺物(4)

の筋が入る。70はミニチュア土器。内外面とも丁寧にナデ調整される。71は蓋と思われる個体である。推定径が38cmの大口径となる製品で、口唇部は角状に面取りされ、中央部に向かって反り気味に立ち上がる器形となる。ロクロ成形で、内面、外面ともヘラナデ調整である。外面は粗い調整痕を残す割に丁寧な造りである。同じ破片が他に2点あるが接合はしない。72は須恵器壺である。頭部から胴部の破片で、肩が大きく張る。広口壺となろうか。外面に光沢のある自然釉が掛る。73の土馬は右後脚以外の脚部と左耳端部、胴部背中の一部を欠くが、頭部から尾部まではほぼ全容がわかる資料である。頭部は顔をやや右に傾ける。裏側からの観察では、頬の部分で粘土を内側へ折り返していることが分かる。頭から尻尾にかけてヘラ状工具でなでて細部まで丁寧に仕上げている。全長124cm、全高10.0cmである。住居跡の時期は坏・皿類の共伴関係から9世紀中葉に位置づけられる。

S I O O 6 (第 21 図、図版 4)

調査区西側、2A13・14・18・19 グリッドに位置し、南側を SI007 に切られている。西側は崖面に接しているため、遺構の半分ほどの調査に留まっている。また、遺構確認面は北側から南側へ約 50cm の高低差で傾斜している。平面形は検出された部分の状況から長方形になると推定される。規模は東壁側で 5.88 m である。底面(床面)は北側から南側に向かって緩やかに傾斜(高低差約 30cm)しており、通常の住居跡でみるような硬化した床面が存在しない。また、柱穴も検出できなかった。壁は北壁から東壁中央付近まで垂直に近い角度で立ち上がるが、それ以降では角度が緩く開き気味となっている。確認面からの深さは北壁側で 33 cm ~ 26cm、東壁側から南壁の一部で 35cm ~ 13cm である。検出された範囲では炉跡や柱穴等住居跡と考えられる施設が無く、生活痕跡の希薄な遺構である。

遺物は少なく、散漫な出土状況であった。図示できたのは高坏の脚部 2 点である。1 は外面を縱方向のミガキと赤彩が施され、透かし孔が 2 か所認められる。坏底部はナデ調整である。2 も外面に赤彩を施している。この他覆土中から小型壺の口縁部や刷毛目痕の残る壺の破片等が出土していることから、古墳時代前期に位置づけられる。

S I O O 7 (第 21 図、図版 4・16)

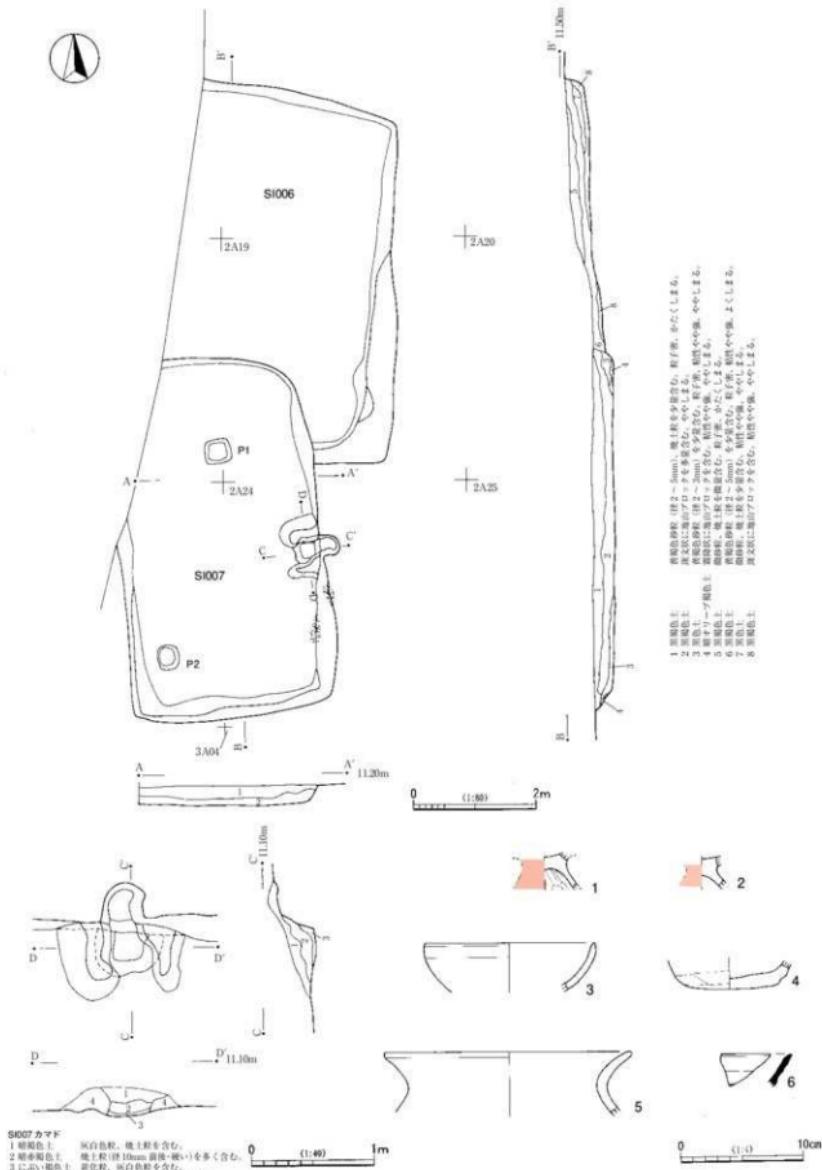
2A18・19・23・24 グリッドに位置し、北側の SI006 を切っている。同じく北西側の一角が崖面に接するため、全体を検出できなかった。平面形は長軸方向を南北に向ける長方形で、長軸 5.94 m、短軸 3.45 m である。カマドを東壁に設けている。床面は地山の黄褐色土を主に灰白色粘質土混じりの黄褐色土で貼床され、ほぼ平坦である。確認面からの深さは 31cm ~ 26cm である。ピットが北側中央と北西隅の 2 か所で検出されたが、何れも深さ 4 cm 前後と浅いため、柱穴としては考えにくい。カマドは袖部、燃焼部、煙道は残っていた。袖は暗褐色土と灰白色粘土で構築され、煙道の壁面は階段状になり、上段は壁外に 30cm ほど張り出している。燃焼部下は半円形に掘り窪め火床としている。

遺物は少なく、図示した 4 点の他は土師器壺類の破片が散在して出土している。また、遺構確認段階で上層からスラグが集中的に出土したが、これについては後述する。3 は土師器壺で、体部から口縁部まで内湾して立ち上がり、口唇部が僅かに屈曲する。体部はヘラ削りで口縁部との境に弱い稜が認められる。4 は土師器壺の底部である。丸底で器壁が厚く、全体に造りが雑である。5 は口縁部が大きく外反する土師器壺の口頭部である。推定される口径は 22cm 程度で、球形の胴部をもつタイプと思われる。6 は須恵器の口縁部である。小破片で器種の特定が難しいが甌のような小型壺を想定した。下端の強い屈曲が特徴的である。遺構の時期は 3 の土師器壺の形態から 7 世紀前半に位置づけられる。

2 壺穴状遺構と土器集中箇所

S Z O O 1 (第 22 図、図版 4・14・17)

SI005 の東、3A10 グリッドで検出された土器集中と土坑、硬化面の集合である。検出された層位は第Ⅲ層黒褐色土下部から遺構確認面の第Ⅳ層黄褐色土層上面で、壺穴住居のような施設を伴わず、楕円形の土坑とその周囲約 1 m の範囲に土器類がまとまっていた。土坑の規模は長軸 72cm 短軸 57cm、深さ 10cm である。土坑を中心に出土状況を見ると、須恵器壺と土師器壺は上から 1・2・3 の順に重なり、それらに接して 4 の楕鉢、土坑中央の礫を介して 7 の壺、さらに中央からやや外側、土坑壁面に接して 5 の鉢がある。8 の壺は土坑から約 20cm 離れた位置にある。6 の壺は横転して潰れた状態にあり、周囲の地面は火熱により赤化して、壺の下は 5 cm ほど窪んでいる。この赤化部分から壺周辺は 1 m × 2 m ほどの範囲に硬化面が



第21図 S.I.006:007と出土遺物

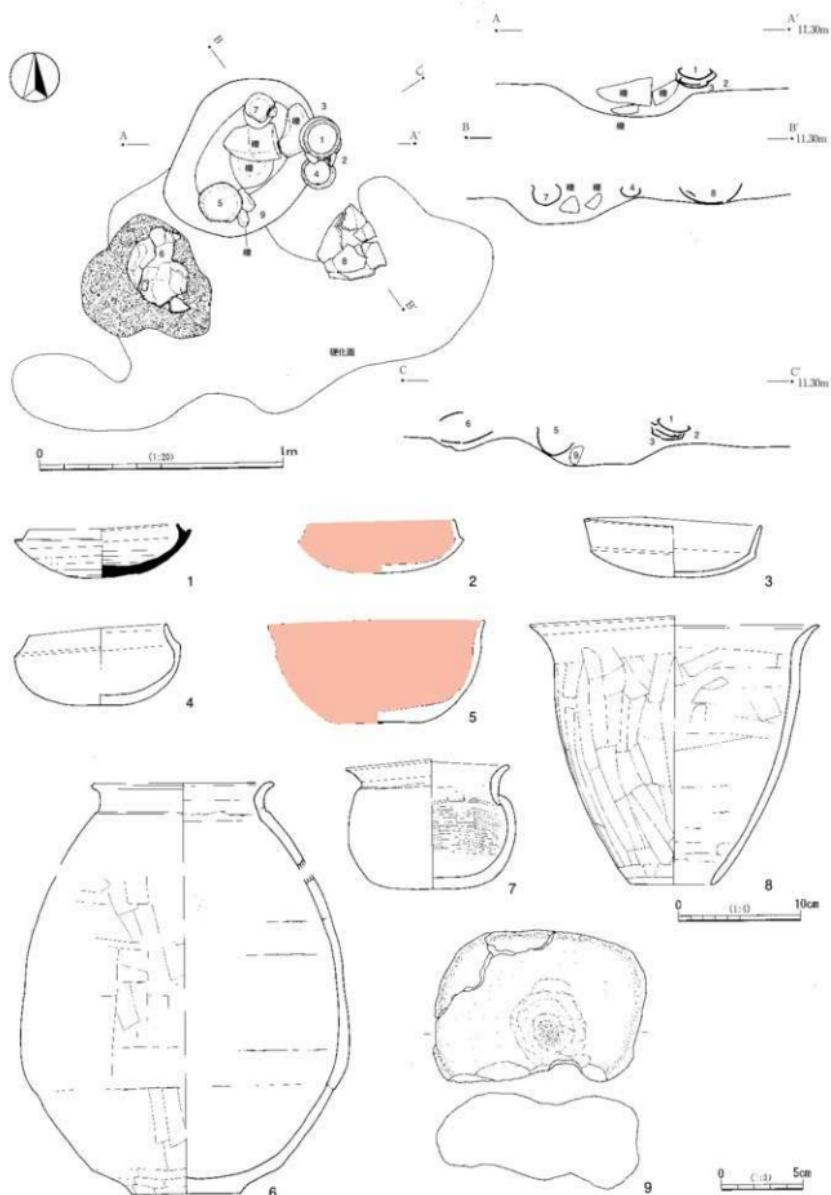
存在する。土器類は壺・鉢・瓶・甕が揃い、生活を営むに足る良好なセット関係である。炉とみられる遺構も存在することから、平地式の建物があった可能性を感じられる。

1は須恵器壺身である。丸底で口唇部が小さく立ち上がり、内傾する。底部の調整は体部の1/3程を回転ヘラ削りで、中心部を削り残している。内外面とも青灰色で、胎土の白色粒が目立つ。2・3は土師器壺である。2は須恵器模倣壺で、口縁部と体部の境の稜が明瞭で突出する形態、3は須恵器蓋模倣壺で体部との境の稜が明瞭で、口縁部がわずかに外反する。4は深い椀形態の壺である。口縁と体部の境の稜が明瞭で、口縁部が内傾してわずかに反る。5は碗である。平底の底部から体部が丸みをもって立ち上がり、弱く屈曲して口縁が外傾する。内外面に赤彩を施す。6の甕は長胴タイプで下膨れの胴部が特徴である。7は小型の甕である。全体に歪みのある造りで、偏屈な胴部に外反する口縁が付く。内面には胴部と口縁部の接合部が残り、胴部に粗い刷毛目調整が残る。胎土に大粒の砂粒を含む「安房型甕」である。8は瓶で、最大径を持つ口縁部から胴部が次第にすぼまる形態である。甕、瓶の類は胎土に粗い砂粒が目立つ。9は碗5の下、土坑底面から出土した凹石で、表裏と図上部側面に窪みがある。長さ13.1cm、幅9.1cm、厚さ6.1cm、重さ0.7kgである。土器群は須恵器壺の形態が陶邑編年TK43型式に類する特徴をもつことから、6世紀後半の時期に位置づけられる。

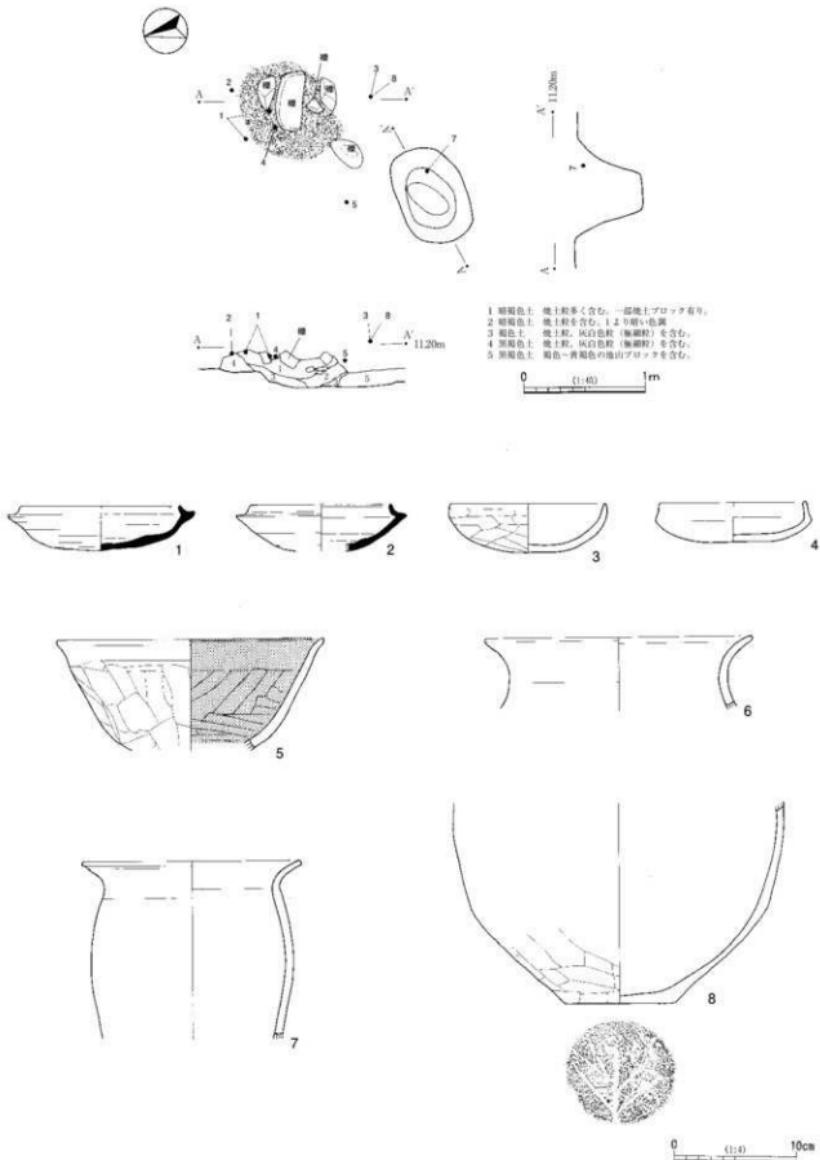
S Z O O 3 (第23図、図版5・15)

調査区の南端、3A13グリッドに位置し、SD004の西1mの距離にある。SZ001と同様、第Ⅲ層中に検出された壺・甕類の遺物集中と礫片を伴う焼上面、ピットで構成される遺構である。焼上面は0.9m×0.7mの範囲に広がり、この層中に厚さ10cm前後の扁平な直方体の泥岩片3個が「川」の字状に並んでいた。中央の泥岩片が最も大きく、長さ50cm、その両側は長さ30cm前後である。泥岩片の下層は焼土粒や焼土ブロックを含む土が堆積し、地山面から10cm程浅く窪んでいた。一方、焼上面の西側には長軸長82cm、深さ約60cmの楕円形のピットが存在する。土器類は泥岩片と同じレベルかやや高い位置にあり、中央の泥岩片のやや東に須恵器壺1・2と土師器壺4、やや離れた周囲に土師器壺3や鉢5があり、ピット内から甕7が出土した。神奈川県相模地域ではカマドの心材に加工された礫片を多用する例が多く、この遺構もそうした例と同様の機能=礫片を組んだカマドのような施設と建物跡があった可能性が高い。

1・2は須恵器の壺である。1はほぼ完形で、扁平な丸底の体部と口縁部が小さく立ち上がり内傾する。底面は回転ヘラ削りで中央部が削り残される。色調は青灰色で、胎土に白色粒が目立つ。2は約1/2の破片である。1よりやや深めで、体部の中ほどまで回転ヘラ削りが及んでいる。また口縁部の立ち上がりもやや強い角度である。色調と胎土の特徴は1と同じである。3・4は土師器の壺である。3は丸底で体部から口縁が丸みを持って立ち上がり、口唇端が尖る。体部はヘラ削り調整で、口縁部との境にわずかな稜を意識している。4は扁平な体部の壺で、口縁部との境に明瞭な稜を持ち、わずかに屈曲して口縁部が内傾気味に立ち上がる。5は鉢である。体部外面は幅広の工具でヘラ削りし、口縁部との境に弱い稜を持つ。内面には黒色処理を施す。6～8は甕である。7は口縁部に最大径をもつ長胴タイプであり、6も同様の器形であろう。8は底部に木葉痕が残る。壺を含め土師器類の胎土、焼成が異なる点が注目される。7はいわゆる「安房型」の特徴である、粗く大粒の砂粒が目立ち焼成が甘い。6は固くよく焼成されている。壺類も3・5は細かな砂粒が多く、表面が砂っぽいのに比べ、4では胎土の砂粒が大粒でかつ白色粒が目立ち、固くよく焼きしまっているという違いがある。3・5・7が在地産、4・6が搬入品の可能性がある。遺構の時期は須恵器壺の形態が陶邑編年TK209型式に類することから6世紀末から7世紀初頭に位置づけられる。



第22図 S Z O O 1と出土遺物



第23図 SZ003と出土遺物

S Z O O 2 (第 24 図、図版 5・15)

調査区の南端、3A20・25 グリッドに位置する竪穴状遺構の一部分である。確認面からの深さは 3cm～4cm で木根の搅乱を受けて壁の状況は良くない。底面の一部に径 30cm ほどの範囲で焼けた痕跡が認められ、その周囲は固くよく締まった状態である。焼け面自体に掘り込みは無く、通常の竪穴住居跡にみられるような炉跡とは言い難い状態であったが、東側の壁際底面から甕下半部が出土した他、輪積み痕のある甕口縁部細片と台付甕脚部細片が出土しているため、弥生時代後期の居住遺構である可能性が高い。

1 は甕の胴下半部である。残存部の状況から球形に膨らむ形態の胴部になると思われる。

S Z O O 4 (第 24 図、図版 5)

調査区の南端、3A14～20 グリッドにまたがって検出された竪穴状遺構の一部である。西側を SD004、北側を SI005 に切られている。検出した範囲は長辺が南東～北西に向く方形プランの一角にあたる部分で、南辺側 3m、東辺側 5.9m である。方形プランを想定すると溝 SD004 の反対側（西側）にかかるが、この付近ではなにも検出できなかった。確認面から底面までの深さは全体に浅く、14cm～6cm である。底面は黄褐色土ブロック、灰白色粘質土、黒褐色土の混合土が 5cm 前後の厚さで敷かれており、固く締まりのある状態であった。遺構内には柱穴や炉跡、カマドなど住居跡に伴う施設が一切存在しない。遺物は少なく、散漫な出土状況である。すべて土器小片で図示できるものはないが、刻み目のある甕の口縁部や輪積み痕を残す口縁部片があり、弥生時代後期の遺構である可能性が高い。

3 土坑とピット (第 25・26 図、図版 5・6)

土坑とピットは遺構群のはば中央、SI001 と SI005 の間の区域で、ちょうど地山層が北から南へ傾斜して平坦面を形成するあたりに分布している。ピットは連携して建物跡を構成するような配置ではなく、それぞれ単独の遺構と判断した。

S K O O 2 3B01・02 グリッドにまたがって位置する。平面形は長軸 1.4m、短軸 1.07m の楕円形で、深さは 8cm である。底面はほぼ平坦で、浅い割に壁の立ち上がりがしっかりしている。遺物はない。

S K O O 3 3B07 グリッドに位置する。平面形は径 68cm × 61cm のほぼ円形で、深さは 20cm である。底面はわずかに起伏があり、壁が緩やかに立ち上がる。遺物はない。

S K O O 4 2A20・25 グリッドにまたがって位置する。平面形は径 80cm × 73cm のほぼ円形で、深さは 26cm である。底面は椀状に中央が深くなり、壁が緩やかに立ち上がる。遺物は土師器の甕底部片ほか 5 点ほどの破片が出土している。

S H O O 1 2A25 グリッドに位置する。平面形は径 30cm × 27cm のほぼ円形で、深さは 25cm である。土師器破片 1 点が出土したが、器種は不明である。

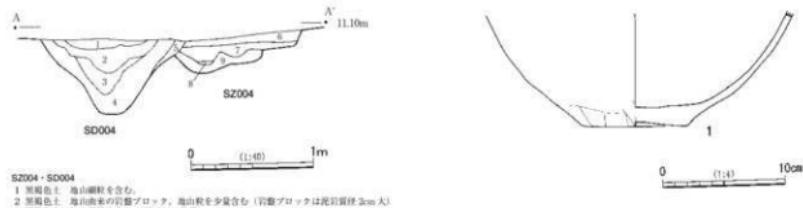
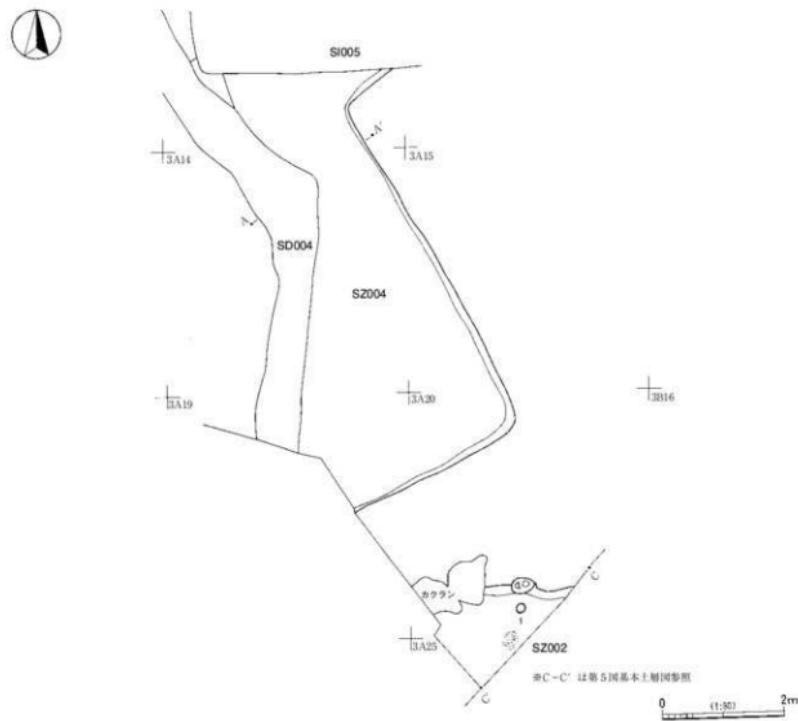
S H O O 2 3B01 グリッドに位置する。平面形は長径 42cm の楕円形で、深さは 26cm である。

S H O O 3 3B02 グリッドに位置する。平面形は長径 50cm の楕円形で、深さは 24cm である。土師器破片 1 点が出土したが、器種は不明である。

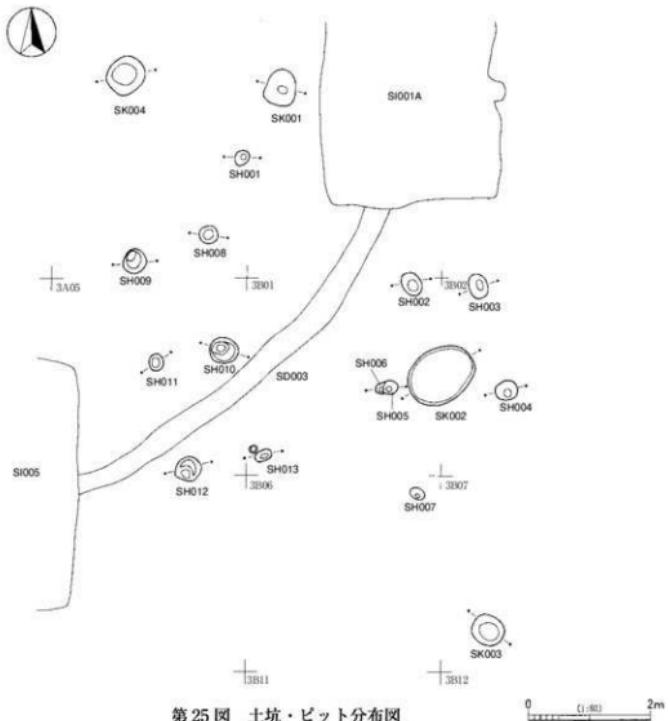
S H O O 4 3B02 グリッドに位置する。平面形は径 40cm のほぼ円形で、深さ 37cm である。土師器破片 3 点が出土したが、器種は不明である。

S H O O 5・0 0 6 3B01 グリッドに位置し、大小二つのピットが重複し、005 が 006 を切っている。規模は 005 が径 24cm、深さ 22cm、006 が径 20cm、深さ 15cm である。

S H O O 7 平面形は長径 33cm の楕円形で、深さ 10cm である。覆土は黄褐色粒を含む黒褐色土の單層である。



第24図 SZ002・004と出土遺物



第25図 土坑・ビット分布図

S H 0 0 8 2A25グリッドに位置する。平面形は径32cmのほぼ円形で、深さ38cmである。

S H 0 0 9 2A25グリッドに位置する。平面形は径41cmのほぼ円形で、深さ25cmである。

S H 0 1 0 3A05グリッドに位置する。平面形は径61cmのほぼ円形で、深さ16cmである。

S H 0 1 1 3A05グリッドに位置する。平面形は長径28cmの楕円形で、深さ24cmである。

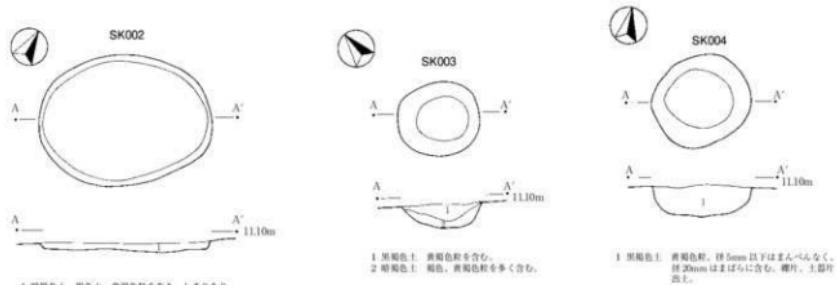
S H 0 1 2 3A05グリッドに位置する。平面形は長径55cmのほぼ円形で、深さ28cmである。遺物は、土師器破片3点が出土し、うち1点は古墳時代後期の土師器壺口縁部の破片である。

S H 0 1 3 3B01グリッドに位置する。平面形は長径37cmの楕円形で、深さ20cmである。遺物は土師器破片1点が出土したが、器種は不明である。

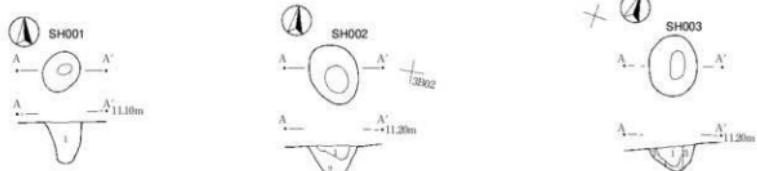
4 溝

S D 0 0 1 · 0 0 2 · 0 0 3 (第27・28図、図版6・7・15)

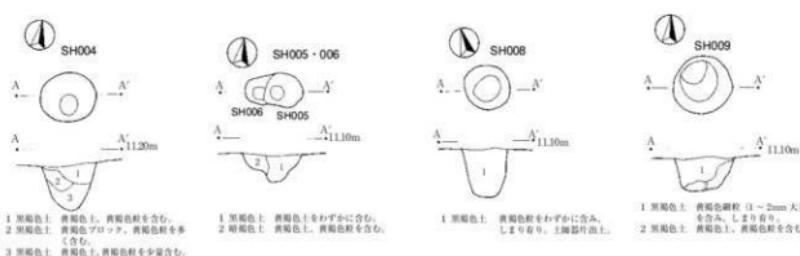
SD001とSD002は調査区の東側、遺構群の東端を南北方向に延びて交差する。SD003は南西から北東に調査区中央部を縱断してSD001と交差・合流する。また、SD003はSI001A・BとSI005に切られている。溝同士の新旧関係は(古)SD002→SD001→SD003(新)である。



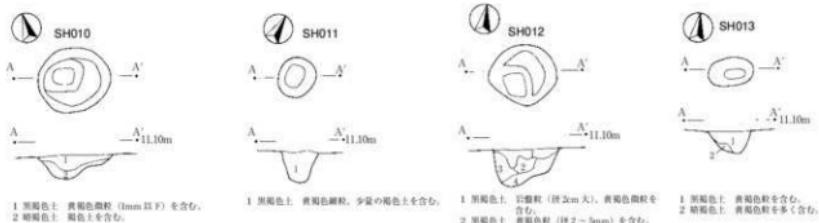
1 黒褐色土 黄褐色土 黄褐色を含み。しまりあり。



1 黒褐色土 黄褐色をわずかに含む。
しまりあり。土器片出土。



1 黑褐色土 黄褐色土を含む。
2 黑褐色土 黄褐色土を含む。
3 黄褐色土 黄褐色土 黄褐色土を少含む。



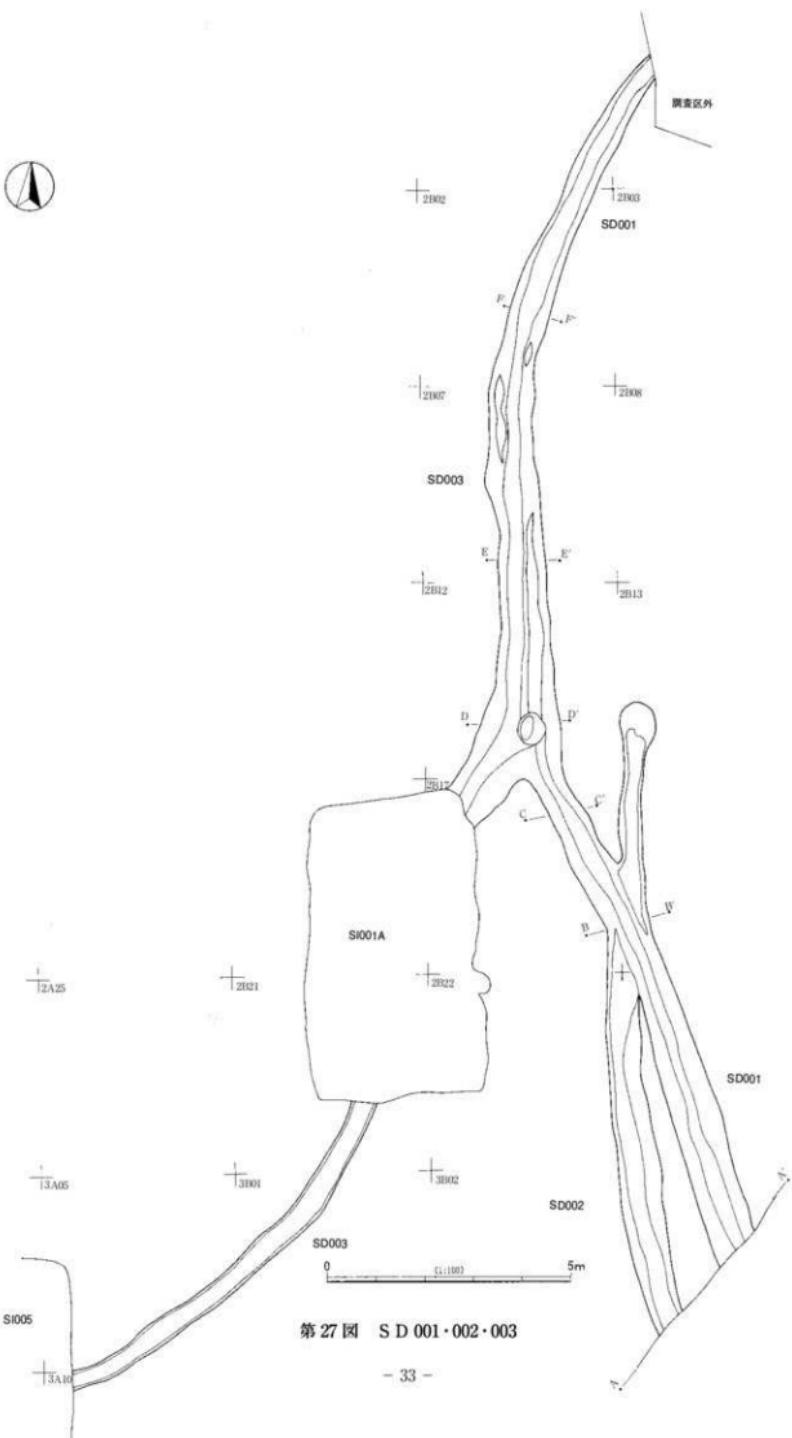
1 黑褐色土 黄褐色細粒。少量の褐色土を含む。
2 黑褐色土 褐色土を含む。

1 黑褐色土 黄褐色土を含む。

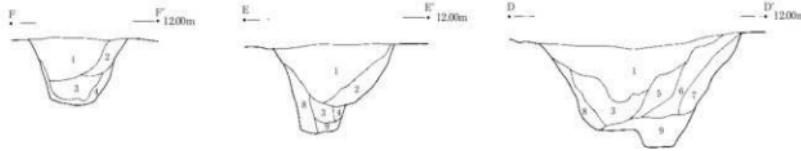
1 黑褐色土 黄褐色土。黄褐色細粒を含む。
2 黄褐色土 黄褐色土 (径 2~5mm) を含む。
3 黄褐色土 黄褐色土を含む。
4 黄褐色土 褐色土が混ざる。

0 (1:40) 1m

第 26 図 土坑・ピット



第27図 SD 001-002-003

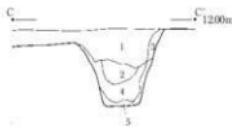


F-F' 土層

- 褐色土
- 黒褐色土
黒褐色土を多くとす。少し塊状のブロック（径1～2cm）を多く含む。
- 黒褐色土
黒褐色土を多くとす。砂利、砂山小ブロック（径0.5cm以下）を多く含む。
砂利、砂山小ブロック（径0.5cm以下）を多く含む。
- 褐色土
砂利を含む。ブロックは少ないと。
- 黒褐色土
2に近いが砂利ブロックとも2より少ない。

E-E': D-D' 土層

- 黒褐色土
細かい粒状、砂利を多く含む。
- 黒褐色土
1.2cmのブロックの砂利を多く含む。
- 黒褐色土
地土粒、砂利を多く含む。1より粒子が大きいものを含む。
- 黒褐色土
1.2cmのブロックの砂利を多く含む。
- 黒褐色土
砂利を多く含む。
- 黒褐色土
砂利の一部がブロックになる。
- 褐色土
砂利、地山ブロック（径0.2～2cm）を含む。
- 黒褐色土
砂利、地山に加え、地山ブロック（径0.5～1cm）を含めて多く含む。
- 褐色土
地山ブロック（径1～2cm）を多く含む。



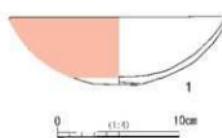
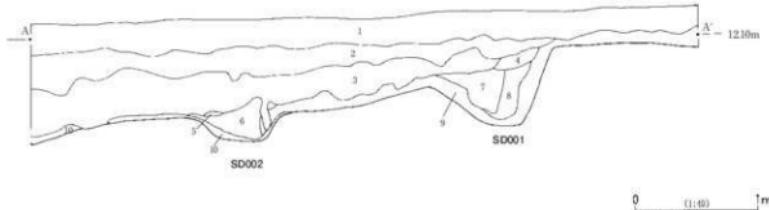
C-C' 土

- 黒褐色土
- オーピー褐色土
砂利、河川下流以下の堆山ブロックを含む。
- 褐色土
黒褐色砂利を多く含む。
- 黒褐色土
砂利、堆山砂を含む。若干の堆山ブロック、黄褐色ブロック（径1cm以下）を含む。
- 1.2cmの黒褐色土
地山灰、黒褐色土を含む。



B-B' 土層

- 黒褐色土
黒褐色砂利を含む。
- 黒褐色土
砂利、地山灰、堆山砂を含む。堆山砂はブロックを含む。
- 黒褐色土
地山土体で、2.5mの黒褐色土を含む。
- 褐色土
黒褐色土（シート質）を含む。
- 黒褐色土
少量の黒褐色砂利を含む。
- 褐色土
7に比べてかなり黒褐色砂利が少ない。
- 褐色土
7に比べて地山質、2.5mの黒褐色砂利を多く含む。
- 黒褐色土
地山土多く含む。SD002の覆土。

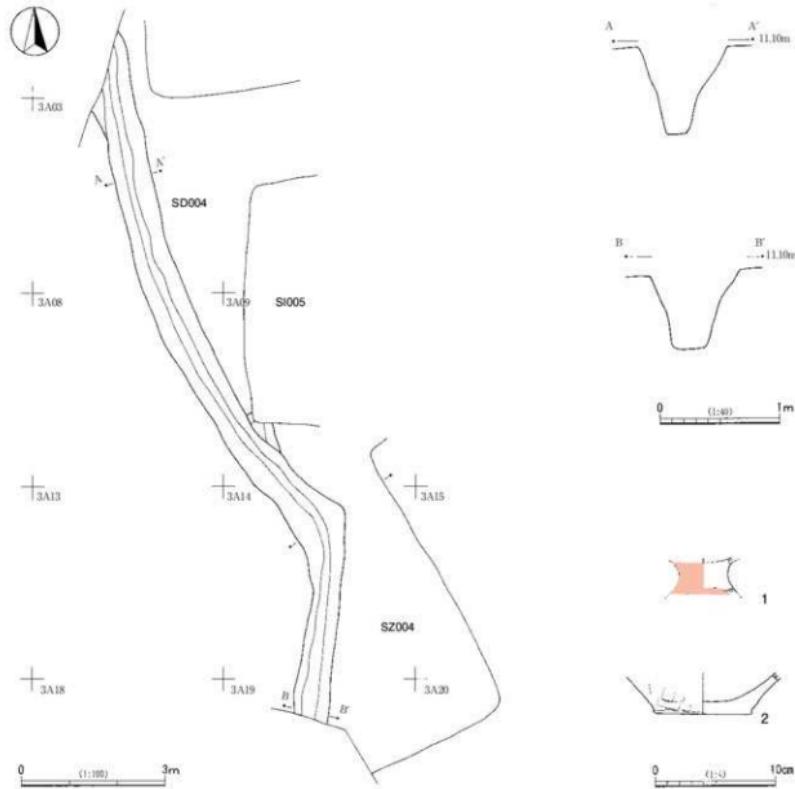


0 (1:4) 10cm

第28図 SD 001・002・003 断面図と出土遺物

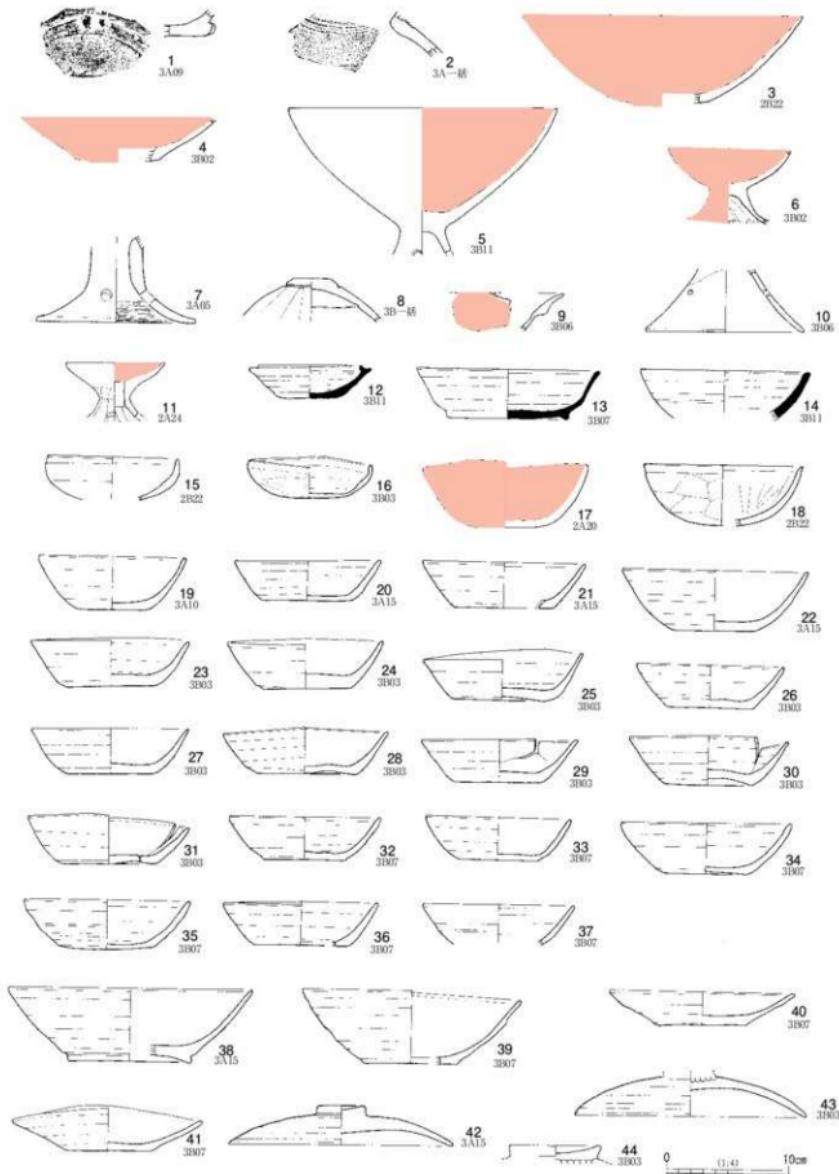
A-A' 土層

- 黒褐色土
耕作土。全体に秋葉。
- 黒褐色土
浅黄色の微粒をまんべんなく含む。
- 黒褐色土
浅黄色質（径1～3mm）をまばらに含む。
- 黒褐色土
堆山砂を含む。堆山砂の一部が砂利。
- 深黒褐色土
3層・堆山質黒褐色を多く含む。
- 黒褐色土
4切削部、4削に比「堆山質」の混入がやや少ない。
- 黒褐色土
4切削部、4削に比「堆山質」の混入がやや多い。
- 黒褐色土
2削に多くの堆山質土を含む。
- 黒褐色土
堆山質土を含む。
- 深黒褐色土
3削の黒褐色土と堆山質土を含む。色調が明るい。
- 深黒褐色土
0.4～10層は風化を受けた等々土層で、自然堆積。
- 5層は不規則で性質不明。

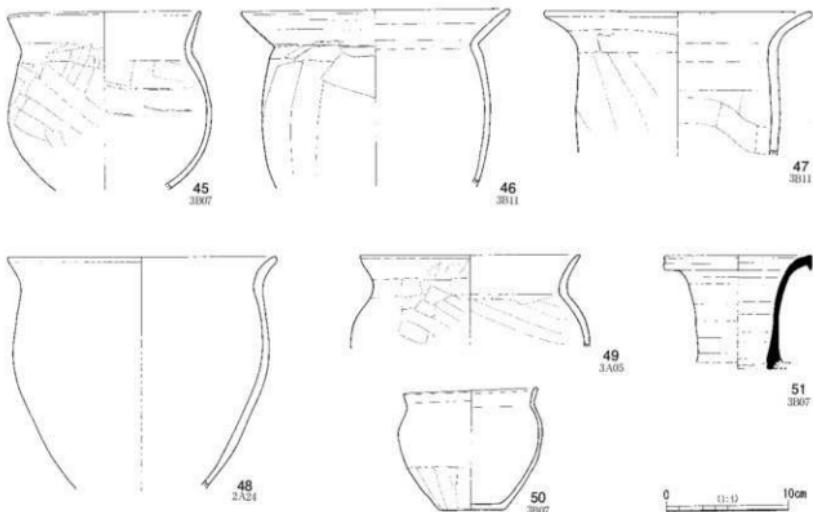


第29図 SD004と出土遺物

SD001は幅98cm~62cm、深さ67cm~64cm、底面幅32cm~20cmで、北端に向かって徐々に深くなっている。断面形状は薺研状である。SD003と重複している範囲を含め延長25mである。SD002は延長13m、幅87cm~41cm、深さ34cm~20cmである。底面は幅30cm~20cmで平坦であり、断面形状は箱薺研に近い形狀である。SD001と交差し、北側で収束する。SD003はSI001A・Bの東側でSD001と合流する。SD001より幅がやや広く、浅めに掘り込まれる。SI001A・Bから西側は地形が変化していくため、底面付近だけが検出された。SI005の南西隅ではSD004が接する部分がかろうじて検出されたが、SD004との前後関係は分からなかった。なお、断面図F-F'の地点ではSD001と重複する状況が認められないことから、SD003はこの直前で収束していると考えられる。第28図1はSD001の覆土中で出土した椀である。小径の上げ底状の底部から丸い半球形の体部をもち、口唇部断面は薄く尖る。外面はミガキ調整のうえ赤彩を施される。時期は古墳時代前期と考えられる。



第30図 古墳時代～平安時代グリッド出土土器（1）



第31図 古墳時代～平安時代グリッド出土土器（2）

S D O 0 4 (第図、図版7)

調査区の西端で南北方向に延びる溝で、延長約15.5mである。段丘面の外縁に沿った位置に掘られている。竪穴状遺構SZ004を切っている。溝は幅1.04m～0.7m、深さ71cm～61cm、底面幅36cm～16cmで、掘方の断面形がSD001と共通している。遺物は土器片が少量出土した。

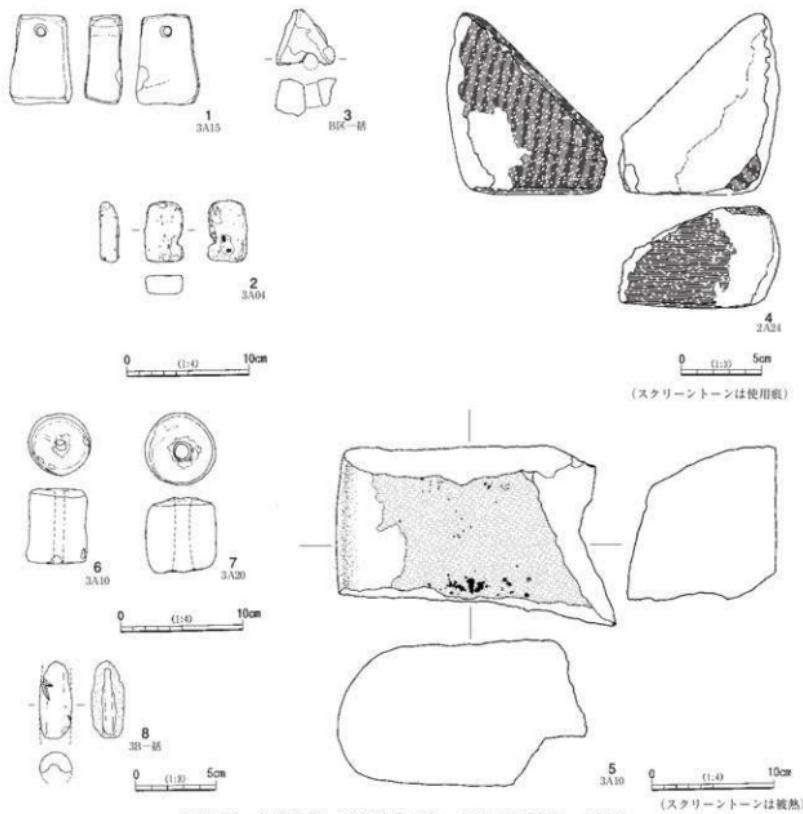
1は高坏の脚接合部である。坏底部内面は丁寧にミガキ調整、外面は縱方向のミガキ調整の後、横方向のヘラなどでをしている。2は底部で、内外面をナデ調整している。いずれも古墳時代前期に位置づけられる。

5 グリッド出土遺物

遺構に伴わない古墳時代から平安時代の土器類、石製品、土製品である。主に第Ⅲ層中から出土しているが、土器類では南東側3B03・07グリッドで集中が認められた。3B03グリッド出土の坏類には焼成時に生じたと思われる歪みや割れ、ヒビが入った製品が目立ち、土器集中下層に焼土の堆積が認められた。また、鉄床石が3A10グリッドで出土した。

(1) 土器・須恵器(第30・31図、図版7・15・16)

1は壺型土器の有段口縁の下部で、一对の棒状浮文状の粘土粒が貼り付けられている。胎土に細かな砂粒を含み、焼成は良い。9にも有段口縁で赤彩を施されている。2は小型壺の胴部上位である。頸部との境に幅の狭い櫛描文が施される。胎土に細かな砂粒を含み、焼成は良い。3～6は高坏で、赤彩を施される。3・4は脚部との境に稜をもつ。5は大きく深い坏部で、脚の一部に透かし孔が認められる。4は小型の坏で、脚裾部が広がるタイプと思われる。7・11は器台、10も小さな透かし孔が1つあり、器台の脚と思われる。8は蓋とした。壺か甕の底部外縁に溝状の深く抉られた加工痕が残る。紐を結ぶなどして蓋として再利用したものであろう。以上1～11は古墳時代前期の所産である。12・13は須恵器の坏である。12は完形で



第32図 古墳時代～平安時代グリッド出土石製品・土製品

ある。小型の製品で、口縁部が小さく立ち上がる。底部は平らで、中央部を残して回転ヘラ削りである。器形、法量から7世紀中葉に比定される。13は高台付壺である。高台の断面は角型で外に開き、底部は高台内に収まる。胎土に白色粒が目立ち、断面の色調が赤みを帯びる特徴から陶邑製品と考えられる。時期は7世紀末。14は蓋の可能性もあるが、口唇部が外反する形態から壺身若しくは高壺と考えた。15～18は外面をヘラ削り調整で整える壺である。15・16は小振りで体部から口縁部が内溝し、器壁の厚さが一定していない。17は大振りで、全体に歪む。底部内面を指先で押さえて整形している。18は内面に放射状の暗文を施す。19～37はロクロ成形の壺である。体部から口縁部が直線的に開く20のタイプと体部が丸みを持って立ち上がる27のタイプがある。また、25・29・30・31は歪みや割れが入る。底部調整は19・27・30が底面中央に糸切り痕を残し、他は全面をヘラ削りである。38・39は高台付椀、40・41は皿で、41が大きくゆがむ。42は蓋で四型の摘みが付く。内面の調整は丁寧でミガキのような痕跡が認められる。43も同



第33図 スラグ土壤サンプル採取位置

孔のある提げ砥石。1は完形で、上部に径7.6mmの孔があけられる。表裏、側面とも滑らかで丁寧に使用されている。長さ55.3mm、幅38.6mm、厚さ23.7mm、重さ67.6g。2は破片で、砥ぎ面が一部に残るのみである。現存している部分で長さ37mm、幅35.6mm、厚さ22.8mm、重さ14.3g。3は軽石製で、右側面の一部が欠けている。長さ37.8mm、幅25.3mm、厚さ12.4mm、重さ2.7gである。4は三角錐状の製品である。図の表面と右側面、下面に平滑な使用面が残っている。元々は長方形(直方体)で、割れたものをそのまま再利用したのであろう。長さ11.1cm、幅9.8cm、厚さ6.3cm、重さ585.9gである。5は鉄床石の破片である。扁平な安山岩の平坦面を作業面としている。平坦な作業面と自然面を残す側面の一部にタール状の鍛造剥片が付着し、被熱して赤化している。長さ22.8cm、幅14.9cm、厚さ12.7cm、重さ5.5kgである。6・7は円筒形の土錐、8は細長い土錐である。6は表面が滑らかな整形で、長さ46.8mm、径38.0mm、重さ66.4g。7は表面に白い塗膜のような付着物がある。長さ46.7mm、径44.0mm、重さ94.4gである。8は縦に割れ、現存長45.9mmである。

6 製鉄関連遺物（第33・34図、図版7）

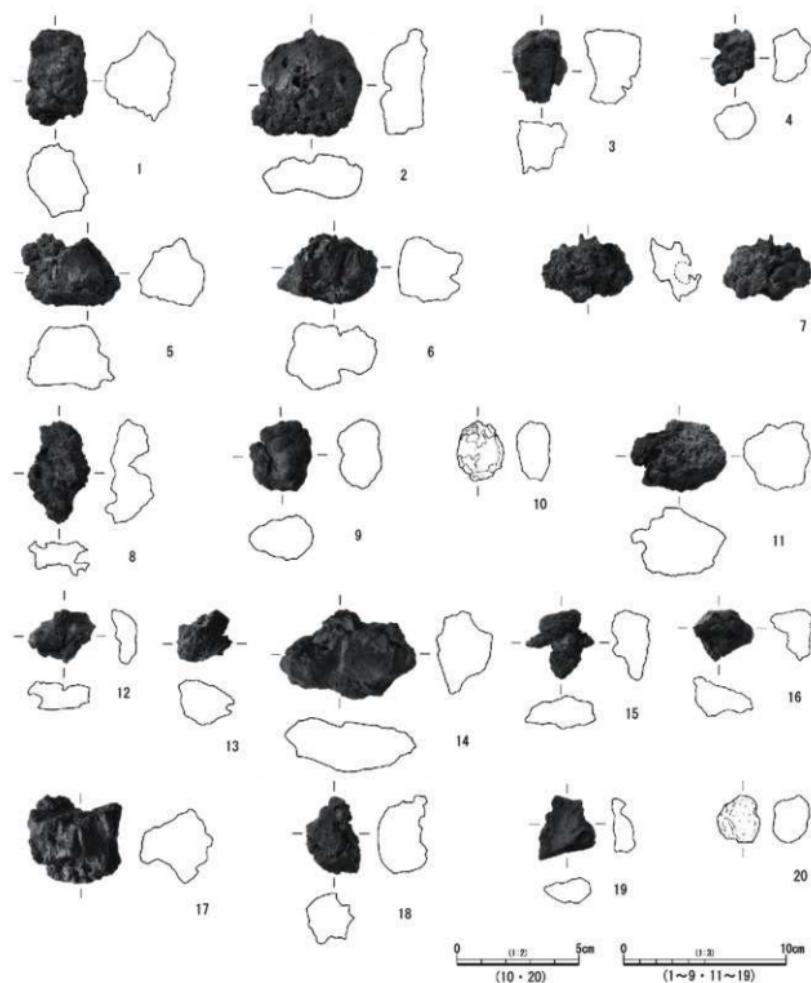
遺構検出作業の段階で第Ⅲ層黒褐色土層からスラグが検出されていた。特に堅穴住跡SI001A付近とSI007付近、2A18～24グリッドに集中が見られた。SI007付近では1グリッドを4分割した上でまとめて取り上げを行い、併せて微細遺物を確認する目的で8カ所の土壤サンプルを採取した。ここでは、遺跡全体で出土したスラグをまとめ、観察・集計した結果を第34図及び第1表から第3表に示した。なお、スラグの観察、分類にあたっては、神野 信氏の協力を得た。

スラグの観察では、①表面がすべて割れ口に囲まれた炉内滓のブロックが主体。②含鉄の炉内滓も多いが、鉄塊を咬み込むような鉄塊系のものが少ない。③炉壁(或いは炉底と思われる)が付着した炉内滓が多い。④溶解炉壁、炉内・炉外流动状況が少ない(特に流动滓が無い)。⑤極めて少ないながら木炭の間で焼結した砂鉄の名残と思しき炉内滓がある。以上の特徴から本遺跡のスラグ類は、製錬あるいは精錬系の滓と考えられ、調査地点外に製錬・精錬炉の存在する可能性が高いと思われる。スラグ類の多くが含まれている第Ⅲ層中の土器類は、平安時代前期9世紀中葉段階が主体であることから、製錬・精錬炉の操業時期も9世紀中葉を下限として考えておきたい。

様の摘みが付くであろう。44は摘みの部分である。45～50は甕である。45は胴部に丸く膨らみ、口頭部緩く外反する。頸部が一旦立ち気味となるところが器形の特徴で、49も同類である。46・47は頸部の屈曲が強く、口縁部が大きく開き、長胴となる。48はその中間タイプで胎土に粗い砂粒を含む安房型の甕である。50は小型で、胴部下位を縦方向のヘラ削りで整える。51は須恵器長頸瓶の口頭部である。外面色調は灰色で、胎土に3mm～5mm前後の白色粒が散見される。以上、45・48・49の甕が古墳時代後期、15～44の甕、皿、蓋類、46・47・50・51が平安時代、9世紀中葉の時期である。

(2) 石製品・土製品(第32図、図版17)

1～4は砥石で、3以外は凝灰岩製である。1・2は穿



第34図 製鉄関連遺物

第1表 製鉄関連遺物観察表

件名	番号	遺物番号	遺物番号	種類	最大長	最大幅	最大厚	重量	属性	所見
					mm	mm	mm	kg		
第34回	1	SI001	99	C	52.0	38.0	47.9	145.32	無	炉壁(溶解) 一面に黒色ガラス化した跡が付着し、その対面は黒褐色の細かい凹凸に覆われた面をもつ。外周は被面に囲まれ、断面に径0.2mm大の気孔が散り、光沢をもつ緻密質済。
第34回	2	SI001	100	C	72.1	73.0	29.2	212.74	無	炉内渣 全面被面に囲まれ、径1~8mm大の気孔が散り、光沢のある緻密な渣。底部に発泡した灰色粘土、黒色ガラスが付着した痕跡がある。
第34回	3	SI001	39	C	45.5	32.2	35.5	70.55	無	炉内渣(炉底渣) 前面に明るい褐色粘土塊、砂礫が厚く付着。側面の下部は黒褐色流動渣である。上部には入り赤褐色粘土が付着。被面に囲まれた洋型は径1~3mmの気孔が散り光沢のある灰色を呈す。緻密質、磁質なし。
第34回	4	SI001	54	C	37	26.4	26	29.39	有	炉内渣(炉底渣) 前面に明るい褐色粘土塊、砂礫が厚く付着。側面の下部は黒褐色流動渣である。上面に径2~5mm大の灰色粘土塊が付着する暗灰色の渣。被面に光沢があり径1~3mm大の気孔があるが、緻密質。
第34回	5	SI001	98	C	58.1	40.4	39.4	122.5	無	炉内渣(炉底渣) 下面と直立する側面に灰色粘土が付着。下面に径1~2mm大の櫛状。側面は緻密なスライド粘土となる。洋型は被面に囲まれ、径1mmの気孔が散り光沢のある緻密な渣。
第34回	6	SI001	97	C	60.5	49.8	40.6	124.43	有	炉底渣(粘土付) 下面に径2~5mm大の灰色粘土塊が厚く付着。その間から黒灰色で径2mm大の洋型が溝状に突出する。側面は黒褐色流動渣で径4~6mmの赤褐色粘土塊が付着する。洋型は被面に囲まれて光沢のある緻密質。なるべく下面の粘土と洋型に径8mm大の小さな木炭塊があり。
第34回	7	SI004	19	B1	55.0	41.6	25.5	37.66	無	炉内渣 上・下面とも銀色で細かい凹凸に覆われ、下面には径15mm前後の木炭を咬み込んだ痕がある。軽量で磁質しない、多孔質の済。
第34回	8	SI004	19	B1	63	33.2	31	31.39	無	炉内渣 全面に銀色の細かい凹凸に覆われ径10mm大の木炭を咬み込んだ痕がある。軽量で磁質しない。
第34回	9	SI005	110	D	45.7	40	33.9	63.85	有	鐵塊系 楕円形で一部に凹凸があるが、錆による付着土砂によって形は不明。焼射状のワグが入り強く磁質し錆が浮くことから鐵塊を含みられる。
第34回	10	SI001	68	D	24.3	18.7	11.7	8.43	有	鐵塊系 楕円形で銀色の付着物に覆われる。中央に錆が薄く浮き小さな鐵塊が内包されているとみられる。
第34回	11	2A19	8	A1	39.5	55.0	45.7	60.65	無	炉壁(炉内渣付) 下面上部2~6mm大の灰色粘土塊、底立する側面に径1mmに発達した灰褐色粘土による粘着。黒褐色洋型付着。洋型は径1~8mm大の気孔があり一部の断面で結晶が光る。
第34回	12	2B22	4	A2	34.6	42.0	15.0	14.13	有	炉壁(溶解) 表面は黒褐色のガラス化し、筋状に波打った流動状で黒色ガラス内に10mm大の明灰色粘土ブロックを含む。
第34回	13	3B01	2	A2	37.8	36.0	26.9	17.64	有	炉壁(溶解) 明灰色粘土が径1mm大に発泡しながら黒緑色にガラス化し、黒色ガラス化する過程が層状に残る炉壁。
第34回	14	2A19	8	B1	53.2	79.8	34.0	222.9	有	炉内渣 全面被面に覆われ一部に錆が付着する黒色洋型。被面の一部に1mmの気孔が集中するが結晶が光る緻密質の済。(鉄塊は含まないが、その面刃にあったものであろう)。
第34回	15	2B21	1	B1	30.1	42.0	22.6	25.37	有	鐵塊系 全体に錆が強く付着土砂が多くため正確な形は不明。土砂の間に黒色で結晶が光る済が見える。色銀と磁質することから含鐵炉内渣とみられる。
第34回	16	2A24	2	B2	32.8	39.7	22.8	30.39	有	炉内渣(粘土付) 上面は黒褐色粘土が付着し、外周を被面に囲まれた緻密黑色の済。粘土付裏面の対面は細かい凹凸に覆われ、結晶が光る。
第34回	17	2B16	2	C	61.4	59.0	52.5	202.28	無	炉内渣(粘土付) 半球形の黒褐色で外縁に径3mm大の角錐状の灰色粘土が付着。表面はガラス質の波動面が残り内部に発泡した径1~8mm大の灰色粘土ブロックを含む。(形状と粘土の付着状態から流出孔の可能性あり)。
第34回	18	3B01	2	C	47.8	29.9	31.7	59.06	有	炉内渣(溶動状) 上面は銀色のやや赤色を帯びた黒褐色流動面。下面はこぶ状にふくらむ流動面の薄い流動面で一部に倒錠部を残す。被面には径1mmの気孔がある。(唯一銀浴済の可能性あり)。
第34回	19	3B11	3	E1	36.2	37.6	14.6	20.44	有	鐵塊系 大形で付着土砂が厚いため正確な形は不明。錆が濃く浮き強く磁質することから小さな鐵塊が内包されていたとみられる。

第2表 製鉄関連遺物分類集計表

分類	A1 数量	A1 重量	A2 点数	A2 重量	B1 点数	B1 重量	B2 点数	B2 重量	B3 点数	B3 重量	C 点数	C 重量	D 点数	D 重量	E1 点数	E1 重量	E2 点数	E2 重量	合計組別	重量計
S001A	36	146.42	1	1.03	26	151.25	47	562.66	2	36.18	14	894.94	4	32.11	13	63.71	1	10.82	146	1899.12
S001B	1	1.01			1	9.72			1	53.55									3	64.28
S004					19	243.53													19	243.53
S005	3	15.14	3	12.09	15	165.44	1	10.98					1	63.85	1	5.12	1	1.69	25	274.31
S006					1	2.64	2	0.6											3	3.24
S007	11	39.42	19	83.85	44	152.12	15	126.98		1	62.61			1	13.99			91	478.97	
2A1B					20	54.74	32	106.48										52	161.22	
2A19	11	69.76	3	11.98	24	315.27	33	175.54					1	4.85				72	577.4	
2A23	4	2.27	3	4.91	6	28.75	12	49.36										25	85.29	
2A24	13	17.73	22	94.95	33	110.95	2	34.67										70	258.3	
2B16	1	2.03	2	8.73	5	26.8	14	217.88		3	250.49							25	505.93	
2B21	1	37.72	2	11.87	5	57.87	3	26.25		1	57.39							12	191.1	
2B22	3	1.73	1	14.13			1	9.35										5	25.21	
3A04			1	5.84	4	13.81												5	19.65	
3B01			3	46.97	5	31.8				2	63.29	2	17.2					12	159.26	
3B02			5	37.63	14	63.55							1	3.58				20	104.76	
3B06							1	2.78										1	2.78	
3B07			3	7.29														3	7.29	
3B11															1	20.44		1	20.44	
3B区-Ⅱ			3	25.08	5	108.75												8	133.83	
合計	86	333.23	71	366.35	227	1536.79	163	1323.53	2	36.18	22	1382.27	9	121.59	16	103.26	2	12.51	568	5215.26

分類説明

- A か埋系 1 か埋粘土：明黄～明灰色で強く被熱して発泡。
 2 黒色ガラス化：溶解し、黒いアメ状になったもの。
- B か内津系 1 合磁系：磁着する。諸色物が付着。
 2 多孔質で磁着しない。
- C か埋付着か内津 か埋粘土が付着した緻密なか内津
- D 鉄塊系津 強く磁着し、内部に微小な鉄塊があるため、鏽ぶくれやワレが生じている。
- E その他 1 流動状→表面に流動状の面を残すもの。
 2 羽口先端部：羽口内に挿入された羽口先端が溶解してガラス化。

第3表 スラグ土壌サンプル分類表

サンプル名	グリット名	フルイメッシュとスラグ量(g)						サンプル総量(g)	
		10mm		3mm		1mm			
		磁着有	磁着無	磁着有	磁着無	磁着有	磁着無		
ア	2A 18	1.58	—	13.22	4.17	3.29	—	315.34	3226.33
イ	2A 19c	8.32	—	37.43	9.35	4.12	—	163.56	2535.38
ウ	2A 19d	—	—	0.15	0.39	1.95	—	111.16	3469.18
エ	2A 23 b	5.66	—	5.27	2.13	2.07	0.06	130.75	2181.75
オ	2A 24	2.33	—	20.75	5.13	13.24	—	160.05	5599.21
カ	2A 23d	—	—	1.57	0.32	0.52	0.01	111.22	2544.24
キ	2A 24c	5.57	4.35	7.11	1.29	7.68	0.06	158.62	4753.32
ク	2A 24d	—	—	0.84	1.08	3.75	—	215.59	4194.50
計		23.46	4.35	86.34	23.86	36.62	0.13	1366.29	28503.91

＊「ア」以外の砂鉄量はサンプル 1kg で採取

＊スラグの抽出は内観観察及びSUNCROWN MAGNETS No.45を使用した。

＊砂鉄の抽出はSUNCROWN MAGNETS No.45を使用した。

第3章　まとめ

今回の調査は、ごく限られた範囲ではあったが、縄文時代後期後葉～弥生時代前期の土器群、古墳時代と平安時代の遺構群とそれに伴う須恵器や土師器、土馬など、集落の一端が明らかとなった。

縄文時代晩期末から弥生時代前期の荒海式土器の一群は、土坑 SK001 から出土した土器片を含め、明確な遺構を伴っておらず、かつ包含層のような集中的な状況ではなかったが、千葉県内でも数少ない例を追加することになった。

古墳時代・平安時代では、堅穴住居跡 7 棟と堅穴状遺構 2 棟、土坑やピットを伴う土器集中箇所 2か所があり、調査成果の主体を占めるものとなった。古墳時代前期では SI003・SI006 の堅穴住居跡 2 棟と SD001・003・SD004 の溝 3 条が存在する。堅穴住居跡はともに断片的な遺構であった。SI006 のように居住跡とするには躊躇するような、なんら施設を持たない遺構も存在する。溝は SD003 が SD004 に接続するが、SD001 と SD004 は調査区の西と東、ちょうど段丘面の縁端を画するような配置であることに注意される。SD001 と 004 は掘方の断面形が同じで、SD001 では北斜面に向かって徐々に深くなっていくため、通水（排水）施設として利用されたのかもしれない。グリッド出土遺物では有段口縁壺や東海系の底部に棱をもつ高杯などがあり、弥生時代終末から古墳時代前期に定住的な集落が出現している可能性が高い。

古墳時代後期では SI001・SI002・SI004・SI006 の堅穴住居跡と SZ001・SZ003 の遺物集中箇所が存在する。時間軸で列記すると、SZ001・003 が 6 世紀後半～7 世紀初頭、SI002・SI007 が 7 世紀前半、SI004 が 7 世紀中葉、SI001 A・B が 7 世紀後半となり、古墳時代後期に集落が継続して営まれたことになる。堅穴を伴わない SZ001 と 003 が先に存在することが興味深い。堅穴住居跡は平面形が長方形であることも特徴的である。これも南北に長く狭い段丘面という地形に関係していたのかもしれない。

平安時代では 9 世紀中葉の堅穴住居跡 SI005 と 3B03・07 グリッドの土器集中箇所があり、今回の調査で最も遺物量が多い時期である。堅穴住居跡と集中箇所の土器群は、壺・皿・椀・蓋といいうわゆる供膳用の土器類を主体としていて、壺は口径 13cm 前後、底径 8cm～7cm 前後、器高 4cm 前後の製品が多い。皿と椀は高台が削り出し高台と呼ばれるロクロ回転を利用して底部を作りだす技法が認められる。また蓋は上総地域や下総地域をみてもこの種の器種が用いられることは稀である。もう一つの共通項は、製品の中に歪みのある器や底部や体部がひび割れた器があることである。歪みやひび割れは焼成時の温度、素地の収縮により生じたものであろうが、実用品としては違和感がある。土器集中箇所で認められた焼土の堆積を併せて考えると、おそらく一時的な使用、例えば祭祀だけに限って集落内で製作し、使用した製品群と思われる。一方、土馬はその多くが長岡京や平安京など都城の祭祀＝罪や穢れを払うための大祓や祈雨祭祀に使用された祭具のひとつであるが、集落遺跡から単独あるいは土製の人形とともに出土する例があり、都城での祭祀とは異なる祭祀、神への奉獻、捧げ物として使用されたとの説がある。崇り神、荒ぶる神を鎮め、地の神を捧げ奉る祭祀である。SI005 の供膳用土器の一群と土馬は集落内の神奉りの儀式をおこなった証と考えておきたい。

岡町遺跡は、海岸から山稜へと至る丘陵の段丘面に立地する遺跡である。調査地は眼下に蛇行する新田川とその低地を望む幅約 30 m～10m、長さ約 80 m の南北に長い段丘面の一画であり、周囲の地形から、この段丘面に集落と関連遺構群が続くことが予想される。現代では、野菜や特産のビワを栽培する耕地と宅地や寺社が並ぶ集落地となっている丘陵上にどのような古代集落が残っているか、その状況を知る術はない。山塊が背後に迫る海岸部という地理上、地形上の制約から生活域が限定されているが、それぞれの時代時代で連絡と人々の生活が営まれてきたことは容易に想像できる。

第4表 土器觀察表

種類番号	遺物番号	種類	基盤	() は記述 () は施用箇	計測値 (cm)	直角度	傾き	外側色調	備考
第12回1	S 1 801 A	土器	高	9.1 (1.1)	2.7	50%	白地黒合	96. (75 YR 6/3)	ロクロ濃縮
第12回2	S 1 801 A	土器	高	6.0 (1.1)	—	20%	砂地少量合	96. (10 R H 7/1)	ロクロ濃縮
第12回3	S 1 801 A	土器	高	1.3 (1.1)	—	4.1	1.1倍強25%	砂地少量合	に近い砂 (75 YR 6/4)
第12回4	S 1 801 A	土器	高	6.0 (1.1)	—	—	—	砂地少量合	砂地少量合
第12回5	S 1 801 A	土器	高	— (1.1)	—	—	—	砂地少量合	砂地少量合
第12回6	S 1 801 A	土器	高	— (1.1)	—	—	—	砂地少量合	砂地少量合
第12回7	S 1 801 A	土器	高	— (1.1)	—	—	—	砂地少量合	砂地少量合
第12回8	S 1 801 A	土器	高	— (1.1)	—	—	—	砂地少量合	砂地少量合
第12回9	S 1 801 A	土器	高	— (1.1)	—	—	—	砂地少量合	砂地少量合
第12回10	S 1 801 A	土器	高	— (1.1)	—	—	—	砂地少量合	砂地少量合
第12回11	S 1 801 A	土器	高	— (1.1)	—	—	—	砂地少量合	砂地少量合
第12回12	S 1 801 A	土器	高	— (1.1)	—	—	—	砂地少量合	砂地少量合
第12回13	S 1 801 A	土器	高	— (1.1)	—	—	—	砂地少量合	砂地少量合
第12回14	S 1 801 A	土器	高	— (1.1)	—	—	—	砂地少量合	砂地少量合
第12回15	S 1 801 A	土器	高	— (1.1)	—	—	—	砂地少量合	砂地少量合
第12回16	S 1 801 A	土器	高	— (1.1)	—	—	—	砂地少量合	砂地少量合
第12回17	S 1 801 A	土器	高	— (1.1)	—	—	—	砂地少量合	砂地少量合
第13回1	S 1 803	土器	円	— (0.0)	—	—	—	砂地少量合	内面：ミガの痕跡 梱板痕
第13回2	S 1 803	土器	高	— (0.0)	—	—	—	砂地少量合	外面：(25 YR 3/3)
第13回3	S 1 803	土器	高	— (0.0)	—	—	—	砂地少量合	外面：(75 YR 7/6)
第13回4	S 1 803	土器	高	— (0.0)	—	—	—	砂地少量合	外面：(10 YR 8/4)
第13回5	S 1 803	土器	高	— (0.0)	—	—	—	砂地少量合	外面：(10 YR 8/4)
第13回6	S 1 803	土器	高	— (0.0)	—	—	—	砂地少量合	外面：(10 YR 8/4)
第13回7	S 1 803	土器	高	— (0.0)	—	—	—	砂地少量合	外面：(10 YR 8/4)
第13回8	S 1 803	土器	高	— (0.0)	—	—	—	砂地少量合	外面：(10 YR 8/4)
第13回9	S 1 803	土器	高	— (0.0)	—	—	—	砂地少量合	外面：(10 YR 8/4)
第13回10	S 1 803	土器	高	— (0.0)	—	—	—	砂地少量合	外面：(10 YR 8/4)
第13回11	S 1 803	土器	高	— (0.0)	—	—	—	砂地少量合	外面：(10 YR 8/4)
第13回12	S 1 803	土器	高	— (0.0)	—	—	—	砂地少量合	外面：(10 YR 8/4)
第13回13	S 1 803	土器	高	— (0.0)	—	—	—	砂地少量合	外面：(10 YR 8/4)
第13回14	S 1 803	土器	高	— (0.0)	—	—	—	砂地少量合	外面：(10 YR 8/4)
第13回15	S 1 803	土器	高	— (0.0)	—	—	—	砂地少量合	外面：(10 YR 8/4)
第13回16	S 1 803	土器	高	— (0.0)	—	—	—	砂地少量合	外面：(10 YR 8/4)
第13回17	S 1 803	土器	高	— (0.0)	—	—	—	砂地少量合	外面：(10 YR 8/4)
第14回1	S 1 804	土器	高	— (1.1)	—	—	—	砂地少量合	内面：(10 R 5/3)
第14回2	S 1 804	土器	高	— (1.1)	—	—	—	砂地少量合	内面：(10 R 5/3)
第14回3	S 1 804	土器	高	— (1.1)	—	—	—	砂地少量合	内面：(10 R 5/3)
第14回4	S 1 804	土器	高	— (1.1)	—	—	—	砂地少量合	内面：(10 R 5/3)
第14回5	S 1 804	土器	高	— (1.1)	—	—	—	砂地少量合	内面：(10 R 5/3)
第14回6	S 1 804	土器	高	— (1.1)	—	—	—	砂地少量合	内面：(10 R 5/3)
第14回7	S 1 804	土器	高	— (1.1)	—	—	—	砂地少量合	内面：(10 R 5/3)
第14回8	S 1 804	土器	高	— (1.1)	—	—	—	砂地少量合	内面：(10 R 5/3)
第14回9	S 1 804	土器	高	— (1.1)	—	—	—	砂地少量合	内面：(10 R 5/3)
第14回10	S 1 804	土器	高	— (1.1)	—	—	—	砂地少量合	内面：(10 R 5/3)
第14回11	S 1 804	土器	高	— (1.1)	—	—	—	砂地少量合	内面：(10 R 5/3)
第14回12	S 1 804	土器	高	— (1.1)	—	—	—	砂地少量合	内面：(10 R 5/3)
第14回13	S 1 804	土器	高	— (1.1)	—	—	—	砂地少量合	内面：(10 R 5/3)
第14回14	S 1 804	土器	高	— (1.1)	—	—	—	砂地少量合	内面：(10 R 5/3)
第14回15	S 1 804	土器	高	— (1.1)	—	—	—	砂地少量合	内面：(10 R 5/3)
第14回16	S 1 804	土器	高	— (1.1)	—	—	—	砂地少量合	内面：(10 R 5/3)
第14回17	S 1 804	土器	高	— (1.1)	—	—	—	砂地少量合	内面：(10 R 5/3)
第15回1	S 1 805	土器	高	— (1.1)	—	—	—	砂地少量合	内面：(10 R 5/3)
第15回2	S 1 805	土器	高	— (1.1)	—	—	—	砂地少量合	内面：(10 R 5/3)
第15回3	S 1 805	土器	高	— (1.1)	—	—	—	砂地少量合	内面：(10 R 5/3)
第15回4	S 1 805	土器	高	— (1.1)	—	—	—	砂地少量合	内面：(10 R 5/3)
第15回5	S 1 805	土器	高	— (1.1)	—	—	—	砂地少量合	内面：(10 R 5/3)
第15回6	S 1 805	土器	高	— (1.1)	—	—	—	砂地少量合	内面：(10 R 5/3)
第15回7	S 1 805	土器	高	— (1.1)	—	—	—	砂地少量合	内面：(10 R 5/3)
第15回8	S 1 805	土器	高	— (1.1)	—	—	—	砂地少量合	内面：(10 R 5/3)
第15回9	S 1 805	土器	高	— (1.1)	—	—	—	砂地少量合	内面：(10 R 5/3)
第15回10	S 1 805	土器	高	— (1.1)	—	—	—	砂地少量合	内面：(10 R 5/3)
第15回11	S 1 805	土器	高	— (1.1)	—	—	—	砂地少量合	内面：(10 R 5/3)
第15回12	S 1 805	土器	高	— (1.1)	—	—	—	砂地少量合	内面：(10 R 5/3)
第15回13	S 1 805	土器	高	— (1.1)	—	—	—	砂地少量合	内面：(10 R 5/3)
第15回14	S 1 805	土器	高	— (1.1)	—	—	—	砂地少量合	内面：(10 R 5/3)
第15回15	S 1 805	土器	高	— (1.1)	—	—	—	砂地少量合	内面：(10 R 5/3)
第15回16	S 1 805	土器	高	— (1.1)	—	—	—	砂地少量合	内面：(10 R 5/3)
第15回17	S 1 805	土器	高	— (1.1)	—	—	—	砂地少量合	内面：(10 R 5/3)

判別番号	測量番号	種類	部位	計測値 (cm)			測定者	担当	外因色調
				E1E	W1W	部面			
免基原18	S 1 005	上部筋	耳	0.240	7.0	37	40%	移松少融合。	暗赤、黒輪紅紫微
免基原19	S 1 005	上部筋	耳	1.30	7.5	42	100%	移松少融合。	暗赤、黒輪紅紫微
第18回20	S 1 005	上部筋	耳	1.26	7.2	39	60%	1~2mmのコリニア結合。	暗赤、黒輪紅紫微
第18回21	S 1 005	上部筋	耳	1.26	7.2	38	90%	移松少融合。	暗赤、黒輪紅紫微
第18回22	S 1 005	上部筋	耳	1.26	7.0	38	50%	移松少融合。	暗赤、黒輪紅紫微
第18回23	S 1 005	上部筋	耳	1.29	7.0	39	100%	移松少融合。	暗赤、黒輪紅紫微
第18回24	S 1 005	上部筋	耳	1.33	8.0	42	80%	移松少融合。	暗赤、黒輪紅紫微
第18回25	S 1 005	上部筋	耳	1.30	7.7	39	80%	移松少融合。	暗赤、黒輪紅紫微
第18回26	S 1 005	上部筋	耳	1.26	7.2	35	90%	白色状物質。	暗赤、黒輪紅紫微
第18回27	S 1 005	上部筋	耳	1.26	7.8	39	90%	毛色コリニア結合。	暗赤、黒輪紅紫微
第18回28	S 1 005	上部筋	耳	1.24	7.0	35	100%	移松少融合。	暗赤、黒輪紅紫微
第18回29	S 1 005	上部筋	耳	1.22	7.6	38	90%	2mm弱の白色結合。	暗赤、黒輪紅紫微
第18回30	S 1 005	上部筋	耳	1.26	7.8	38	80%	移松少融合。	暗赤、黒輪紅紫微
第18回31	S 1 005	上部筋	耳	1.23	6.8	39	90%	移松少融合。	暗赤、黒輪紅紫微
第18回32	S 1 005	上部筋	耳	0.29	6.9	35	50%	移松少融合。	暗赤、黒輪紅紫微
第18回33	S 1 005	上部筋	耳	0.24	7.0	35	70%	移松少融合。	暗赤、黒輪紅紫微
第18回34	S 1 005	上部筋	耳	1.15	4.7	40	90%	白色状物質。	暗赤、黒輪紅紫微
第18回35	S 1 005	上部筋	耳	—	—	—	40%	移松少融合。	暗赤、黒輪紅紫微
第18回36	S 1 005	上部筋	耳	1.30	7.0	37	80%	白色状物質。	暗赤、黒輪紅紫微
第18回37	S 1 005	上部筋	耳	1.32	8.0	40	80%	移松少融合。	暗赤、黒輪紅紫微
第18回38	S 1 005	上部筋	耳	1.29	7.5	35	100%	白色状物質。	暗赤、黒輪紅紫微
第18回39	S 1 005	上部筋	耳	1.32	7.0	37	70%	移松少融合。	暗赤、黒輪紅紫微
第18回40	S 1 005	上部筋	耳	1.26	7.7	37	100%	白色状物質。	暗赤、黒輪紅紫微
第18回41	S 1 005	上部筋	耳	1.26	7.8	34	100%	移松少融合。	暗赤、黒輪紅紫微
第18回42	S 1 005	上部筋	耳	1.31	7.2	39	100%	移松少融合。	暗赤、黒輪紅紫微
第18回43	S 1 005	上部筋	耳	1.66	7.6	40	100%	移松少融合。	暗赤、黒輪紅紫微
第18回44	S 1 005	上部筋	耳	0.40	6.0	35	20%	移松少融合。	暗赤、黒輪紅紫微
第18回45	S 1 005	上部筋	耳	0.50	6.9	34	25%	移松少融合。	暗赤、黒輪紅紫微
第18回46	S 1 005	上部筋	耳	0.59	7.0	44	60%	移松少融合。	暗赤、黒輪紅紫微
第18回47	S 1 005	上部筋	耳	0.54	7.0	51	70%	移松少融合。	暗赤、黒輪紅紫微
第18回48	S 1 005	上部筋	耳	0.55	7.0	53	20%	移松少融合。	暗赤、黒輪紅紫微
第18回49	S 1 005	上部筋	耳	0.50	7.0	40	25%	移松少融合。	暗赤、黒輪紅紫微
第18回50	S 1 005	上部筋	耳	1.54	6.2	48	90%	移松少融合。	暗赤、黒輪紅紫微
第18回51	S 1 005	上部筋	耳	1.62	6.5	55	70%	移松少融合。	暗赤、黒輪紅紫微
第18回52	S 1 005	上部筋	耳	1.66	6.3	41	90%	移松少融合。	暗赤、黒輪紅紫微
第18回53	S 1 005	上部筋	耳	1.80	9.0	27	50%	石炭化。	暗赤、黒輪紅紫微
第18回54	S 1 005	上部筋	耳	1.62	9.2	30	100%	移松少融合。	暗赤、黒輪紅紫微
第18回55	S 1 005	上部筋	耳	1.78	8.0	33	70%	毛色コリニア結合。	暗赤、黒輪紅紫微

種別番号	漁獲番号	種類	部位	計測値(cm)		漁獲率	網目	外見色調	備考
				HTH	HTL				
第19回56	S 1 065	土渤海	頭	36.0	7.0	3.3	100%	青筋・赤褐色・白色針状物質 含合。	ロクロ濃黒・底色：ベニテゲ
第19回57	S 1 065	土渤海	頭	0.40	0.08	2.8	20%	赤色・コリ・含合。	ロクロ濃黒・底色：ベニテゲ
第19回58	S 1 065	土渤海	頭	18.6	—	3.8	80%	赤色・コリ・含合。	ロクロ濃黒・底色：ベニテゲ
第19回59	S 1 065	土渤海	頭	19.0	—	5.0	100%	青筋・赤褐色・白色針状物質 含合。	ロクロ濃黒・底色：ベニテゲ
第19回60	S 1 065	土渤海	頭	17.0	—	3.4	70%	赤色・コリ・含合。	ロクロ濃黒・底色：ベニテゲ
第19回61	S 1 065	土渤海	頭	0.60	0.08	14.5	20%	赤色・コリ・含合。	ロクロ濃黒・底色：ベニテゲ
第19回62	S 1 065	土渤海	頭	20.4	—	[7.6]	100%	青筋・赤褐色・白色針状物質 含合。	ロクロ濃黒・底色：ベニテゲ
第19回63	S 1 065	土渤海	付糸	14.2	—	[8.0]	100%	青筋・赤褐色・白色針状物質 含合。	ロクロ濃黒・底色：ベニテゲ
第19回64	S 1 065	土渤海	付糸	0.22	—	7.6	14.7	赤色・含合。	ロクロ濃黒・底色：ベニテゲ
第19回65	S 1 065	土渤海	付糸	—	—	8.4	[11.9]	赤色・含合。	ロクロ濃黒・底色：ベニテゲ
第19回66	S 1 065	土渤海	付糸	—	—	9.6	[2.5]	脚部・100% 赤色・含合。	ロクロ濃黒・底色：ベニテゲ
第19回67	S 1 065	土渤海	頭	—	—	11.0	[16.8]	20%	赤色・含合。
第19回68	S 1 065	土渤海	頭	—	—	—	[15.1]	—	赤色・含合。
第19回69	S 1 065	土渤海	頭	—	—	[11.4]	—	赤色・含合。	赤色・含合。
第19回70	S 1 065	土渤海	付糸	—	—	4.0	[1.8]	赤色・含合。	赤色・含合。
第19回71	S 1 065	土渤海	脚?	—	—	63.2	[4.1]	—	—
第19回72	S 1 065	淡渤海	頭	—	—	—	[16.5]	20%	当網合計。
第21回1	S 1 066	土渤海	頭	—	—	[3.0]	—	赤色・含合。	赤色・力弱のベニテゲ
第21回2	S 1 066	土渤海	頭	—	—	[2.7]	—	赤色・含合。	赤色・力弱
第21回3	S 1 067	土渤海	頭	0.40	—	4.0	25%	赤色・コリ・含合。	赤色・含合。
第21回4	S 1 067	土渤海	頭?	—	—	[2.5]	—	赤色・含合。	赤色・含合。
第21回5	S 1 067	土渤海	頭	—	—	[2.0]	—	赤色・含合。	赤色・含合。
第21回6	S 1 067	淡渤海	付糸	—	—	[5.3]	100%	赤色・含合。	赤色・含合。
第22回1	S 2 061	土渤海	頭	—	—	[2.7]	—	赤色・含合。	赤色・含合。
第22回2	S 2 061	土渤海	頭	—	—	4.3	100%	青筋・小赤色。	青筋・赤色
第22回3	S 2 061	土渤海	頭	12.0	—	4.3	90%	赤色・含合。	赤色・含合。
第22回4	S 2 061	土渤海	頭	14.6	—	5.0	100%	赤色・含合。	赤色・含合。
第22回4	S 2 061	土渤海	頭	—	—	6.6	100%	赤色・含合。	赤色・含合。
第22回5	S 2 061	土渤海	頭	17.5	7.0	8.3	100%	赤色・コリ・含合。	赤色・含合。
第22回6	S 2 061	土渤海	頭	15.0	—	[6.5]	100%	100%赤色・ 含合。	100%赤色・ 含合。
第22回6	S 2 061	土渤海	頭	—	9.0	[12.5]	—	赤色・含合。	赤色・含合。
第22回7	S 2 061	土渤海	付糸	[13.0]	—	10.6	80%	赤色・含合。	赤色・含合。
第22回8	S 2 061	土渤海	頭	21.1	6.8(片) 6.2(cm)	2.0	100%	赤色・含合。	赤色・含合。
第22回9	S 2 061	淡渤海	頭	13.0	—	3.6	90%	白色・含合。	白色・含合。
第22回10	S 2 061	淡渤海	頭	0.10	—	[2.6]	40%	白色・含合。	白色・含合。
第22回11	S 2 061	土渤海	頭	12.6	—	4.0	90%	赤色・含合。	赤色・含合。
第22回12	S 2 061	土渤海	頭	12.6	—	3.2	40%	赤色・含合。	赤色・含合。
第22回13	S 2 061	土渤海	頭	—	—	—	—	—	—

種別番号	通称番号	種類	部位	計測値(cm)		測定者	測定日	外見色調			
				()は割合	()は測定値			基部	葉	内面・黒色地帯	
第23番5	S.Z.0001	上部葉	先端	1.16	—	[63]	1月8日	新鮮	赤色スジアリ含む。	内面・黒色地帯	
第23番6	S.Z.0003	上部葉	裏	0.23	—	[63]	1月8日	新鮮	赤色スジアリ含む。	内面・黒色地帯	
第23番7	S.Z.0002	上部葉	裏	0.60	—	[63]	1月8日	新鮮	赤色スジアリ含む。	内面・黒色地帯	
第23番8	S.Z.0001	上部葉	裏	—	9.0	[65]	1月8日	新鮮	赤色スジアリ含む。	内面・黒色地帯	
第24番1	S.Z.0002	上部葉	裏	—	8.6	[62]	40%	新鮮	赤色スジアリ含む。	内面・黒色地帯	
第25番1	S.D.001	上部葉	裏	0.06	0.06	[55]	—	新鮮	赤色スジアリ含む。	外側・黒色地帯のへきり葉	
第25番2	S.D.004	上部葉	裏	—	—	[59]	—	新鮮	赤色スジアリ含む。	外側・黒色地帯	
第25番2	S.D.0001	上部葉	裏	—	6.0	[55]	—	新鮮	赤色スジアリ含む。	外側・黒色地帯	
第26番1	3.A.09	上部葉	裏	—	—	[55]	—	新鮮	赤色スジアリ含む。	外側・黒色地帯	
第26番2	3.A.16	上部葉	裏	—	—	[55]	—	新鮮	赤色スジアリ含む。	外側・黒色地帯	
第26番3	2.H.22	上部葉	裏	0.30	—	[70]	1月8日	新鮮	赤色スジアリ含む。	外側・黒色地帯	
第26番4	3.B.02	上部葉	裏	—	—	[65]	—	新鮮	赤色スジアリ含む。	外側・黒色地帯	
第26番5	3.I.11	上部葉	裏	0.22	—	[120]	1月8日	新鮮	赤色スジアリ含む。	外側・黒色地帯	
第26番6	3.II.02	上部葉	裏	—	—	[61]	30%	新鮮	赤色スジアリ含む。	外側・黒色地帯	
第26番7	3.I.05	上部葉	裏	—	—	[130]	35%	新鮮	赤色スジアリ含む。	外側・黒色地帯	
第26番8	3.-1	上部葉	裏	—	—	[55]	—	新鮮	赤色スジアリ含む。	外側・黒色地帯	
第26番9	3.I.06	上部葉	裏	—	—	[32]	—	新鮮	赤色スジアリ含む。	外側・黒色地帯	
第26番10	3.I.06	上部葉	裏	—	—	[130]	—	新鮮	赤色スジアリ含む。	外側・黒色地帯	
第26番11	2.A.24	上部葉	裏	0.09	—	[48]	40%	新鮮	赤色スジアリ含む。	外側・黒色地帯	
第26番12	3.B.11	前部葉	裏	0.3	50	27	100%	新鮮	赤色スジアリ含む。	外側・黒色地帯	
第26番13	3.B.07	前部葉	裏	0.56	100	40	—	新鮮	赤色スジアリ含む。	外側・黒色地帯	
第26番14	3.B.11	前部葉	裏	0.10	—	[65]	1月8日	新鮮	赤色スジアリ含む。	外側・黒色地帯	
第26番15	2.I.22	上部葉	裏	0.10	—	[55]	20%	新鮮	赤色スジアリ含む。	外側・黒色地帯	
第26番16	3.I.03	上部葉	裏	0.10	—	3.4	90%	新鮮	赤色スジアリ含む。	外側・黒色地帯	
第26番17	2.A.20	上部葉	裏	0.16	—	5.5	—	新鮮	赤色スジアリ含む。	外側・黒色地帯	
第26番18	2.I.22	上部葉	裏	0.10	—	4.9	40%	新鮮	赤色スジアリ含む。	外側・黒色地帯	
第26番19	3.I.10	上部葉	裏	0.10	—	5.0	43	60%	新鮮	赤色スジアリ含む。	外側・黒色地帯
第26番20	3.A.15	上部葉	裏	0.10	24	3.4	50%	新鮮	赤色スジアリ含む。	外側・黒色地帯	
第26番21	3.A.15	上部葉	裏	0.10	80	3.7	100%	新鮮	赤色スジアリ含む。	外側・黒色地帯	
第26番22	3.A.15	上部葉	裏	0.15	29	4.9	30%	新鮮	赤色スジアリ含む。	外側・黒色地帯	
第26番23	3.I.03	上部葉	裏	0.10	70	4.0	90%	新鮮	赤色スジアリ含む。	外側・黒色地帯	
第26番24	3.B.03	上部葉	裏	0.12	72	4.0	100%	新鮮	赤色スジアリ含む。	外側・黒色地帯	
第26番25	3.B.03	上部葉	裏	0.13	75	4.2	100%	新鮮	赤色スジアリ含む。	外側・黒色地帯	
第26番26	3.B.03	上部葉	裏	0.12	70	3.4	90%	新鮮	赤色スジアリ含む。	外側・黒色地帯	
第26番27	3.B.03	上部葉	裏	0.13	70	3.7	50%	新鮮	赤色スジアリ含む。	外側・黒色地帯	
第26番28	3.B.03	上部葉	裏	0.13	78	3.8	90%	新鮮	赤色スジアリ含む。	外側・黒色地帯	
第26番29	3.I.03	上部葉	裏	0.12	70	3.5	100%	新鮮	赤色スジアリ含む。	外側・黒色地帯	

写 真 図 版

図版1



遺跡周辺航空写真

図版 2



遺跡遠景（北東から）



遺跡調査後全景（南西から）



S1001A遺物出土状況（南から）



S1001A・B、SK001（西から）



S1002カマド内遺物出土状況（南西から）



S1003遺物出土状況（西から）



S1002・003（南から）



S1004（東から）



S1005遺物出土状況（南から）



S1005遺物出土状況・北東隅（南西から）

図版 4



S1005遺物出土状況・北西隅（南から）



S1005遺物出土状況・北側（北西から）



S1005土馬出土状況（東から）



S1005（南から）



S1006(手前)・007(奥)（北から）



S1007カマド（西から）



SZ001遺物出土状況（東上から）



SZ001遺物出土状況（北から）



SZ002・遺物出土状況（北から）



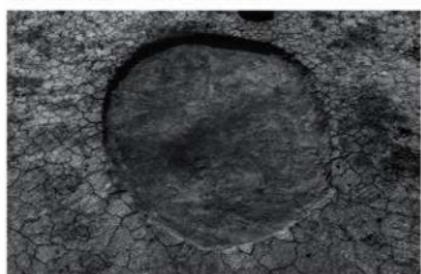
SZ004（南から）



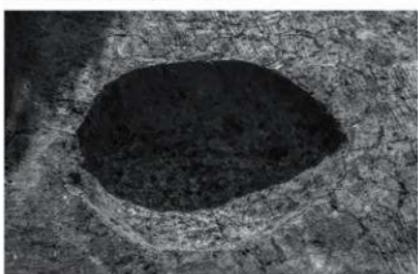
SZ003・遺物出土状況（南西から）



SZ003・遺物出土状況（西から）



SK002（東から）



SK003（東から）

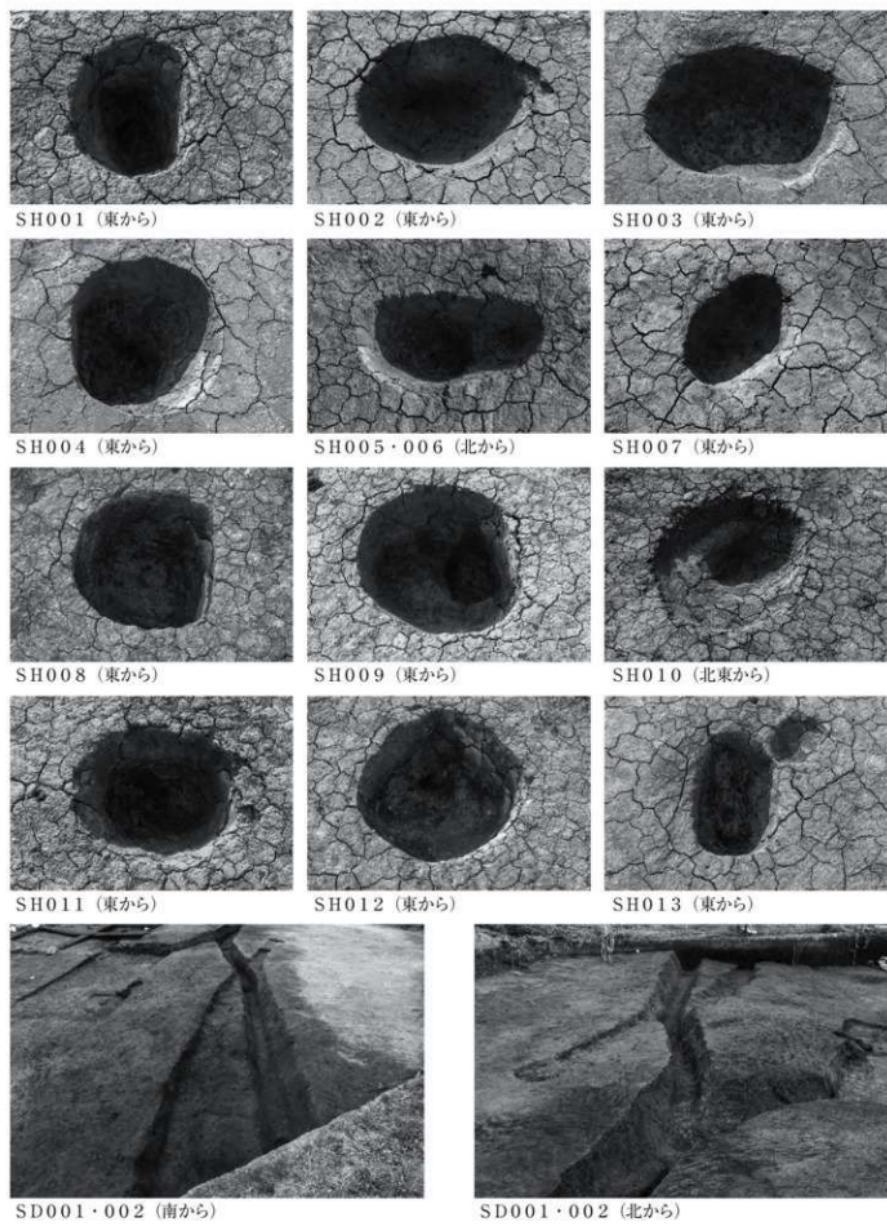


SK004（北東から）



土坑・ビット（東から）

図版 6





SD001・003（南西から）



SD001・003（北東から）



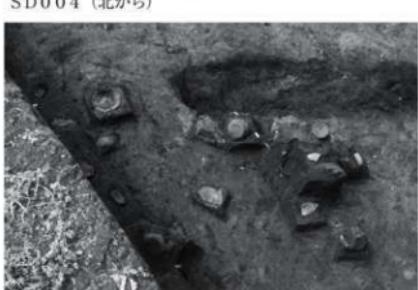
SD004（南から）



SD004（北から）



3B03グリッド遺物出土状況（南西から）



3B03グリッド遺物出土状況（東から）

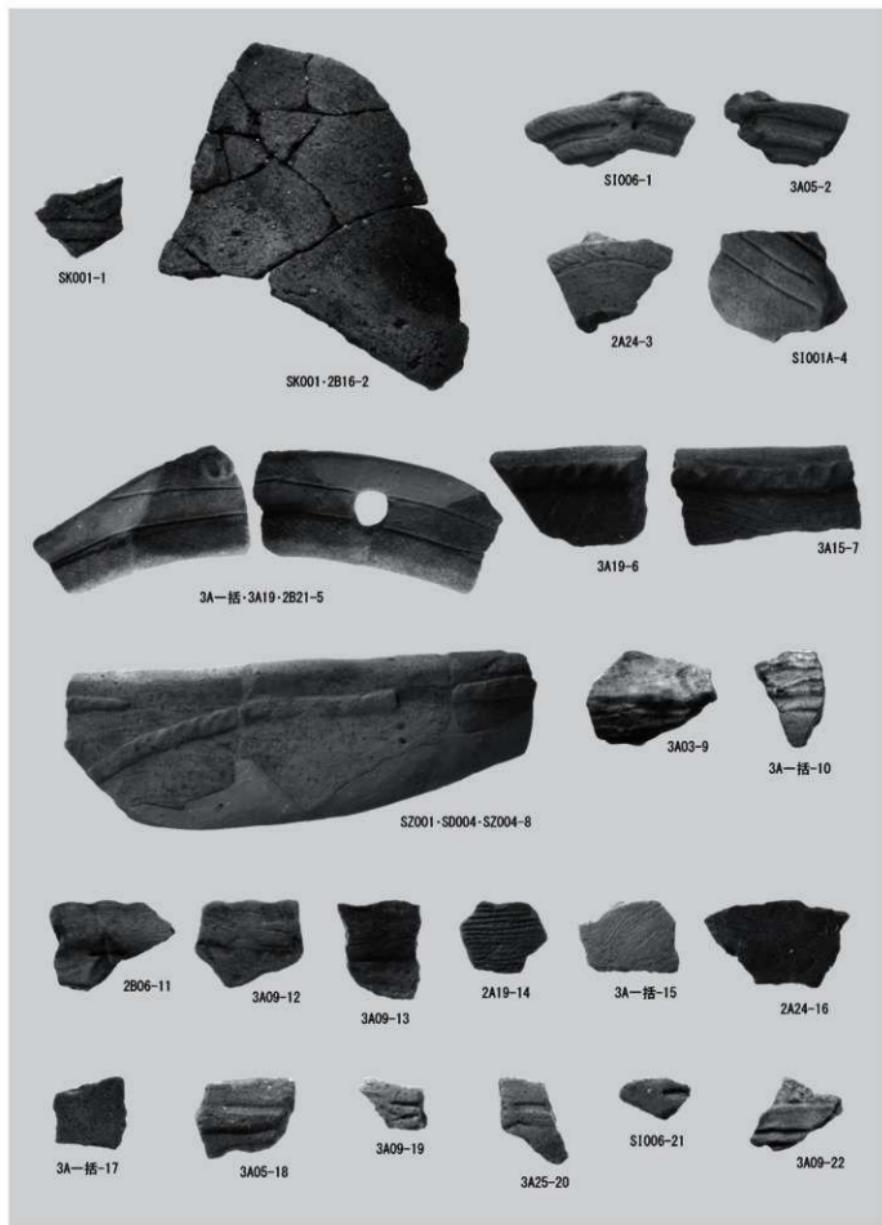


2A23グリッドスラグ等出土状況（東から）

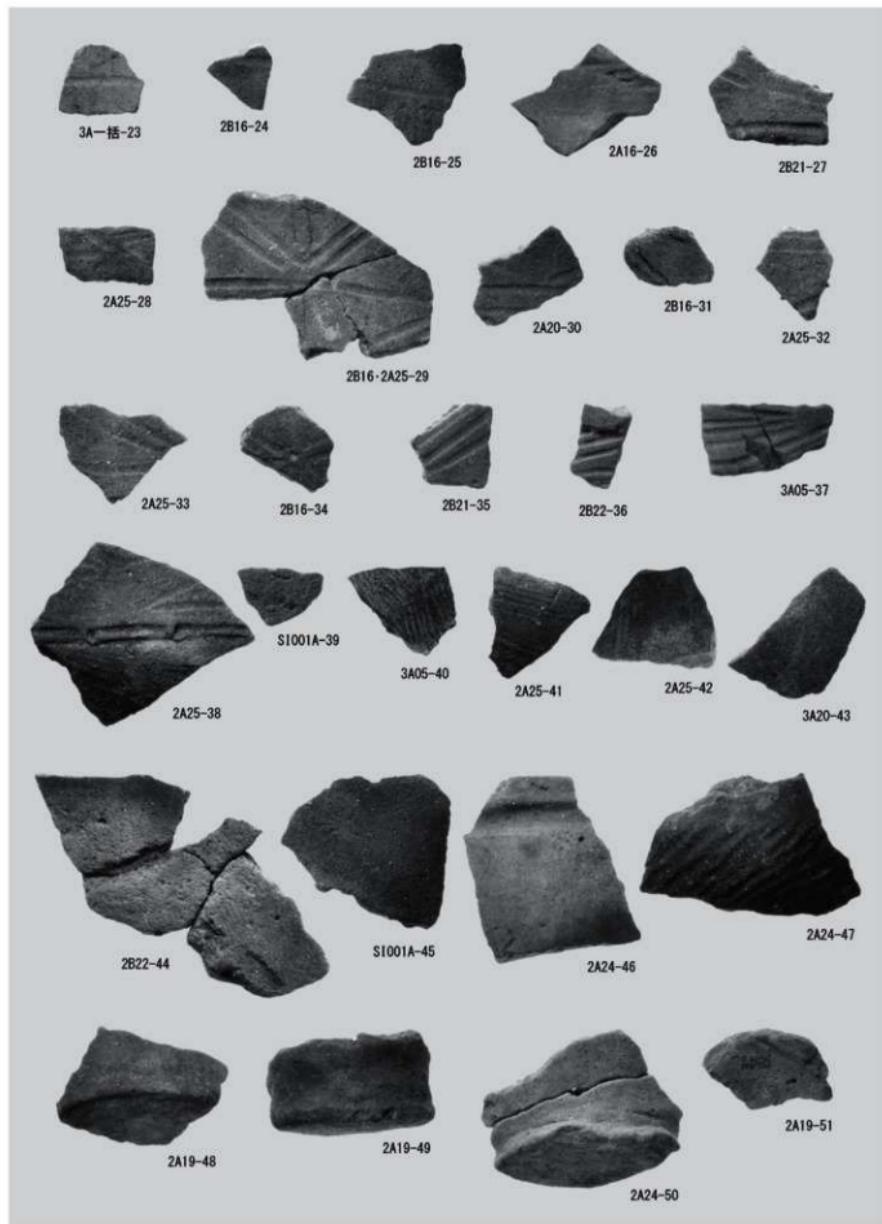


遺構調査風景

图版 8

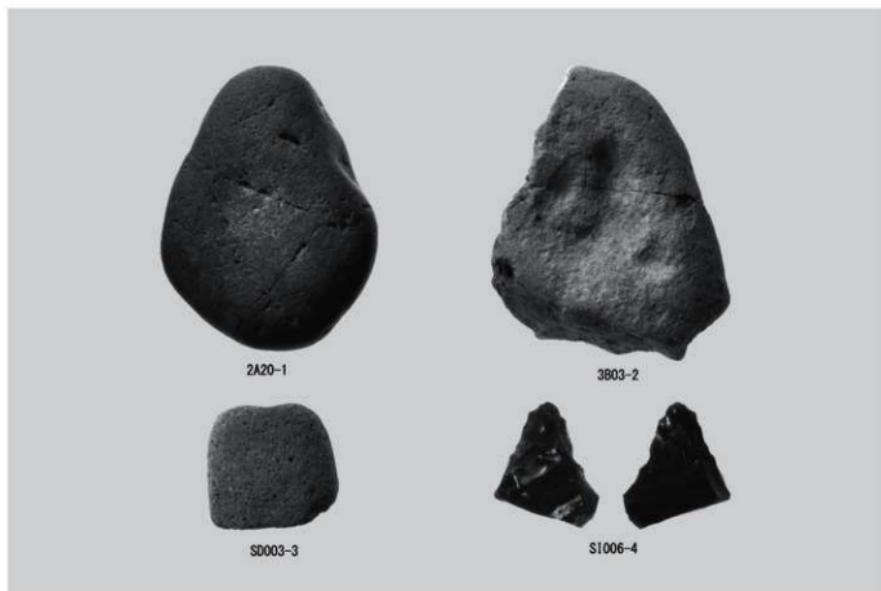


縄文時代土器 (1)

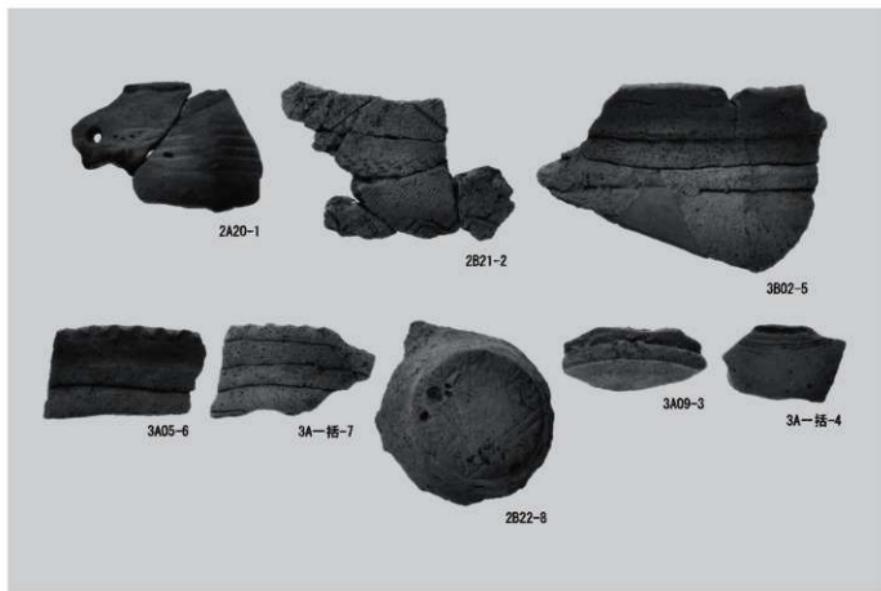


縄文時代土器 (2)

图版 10

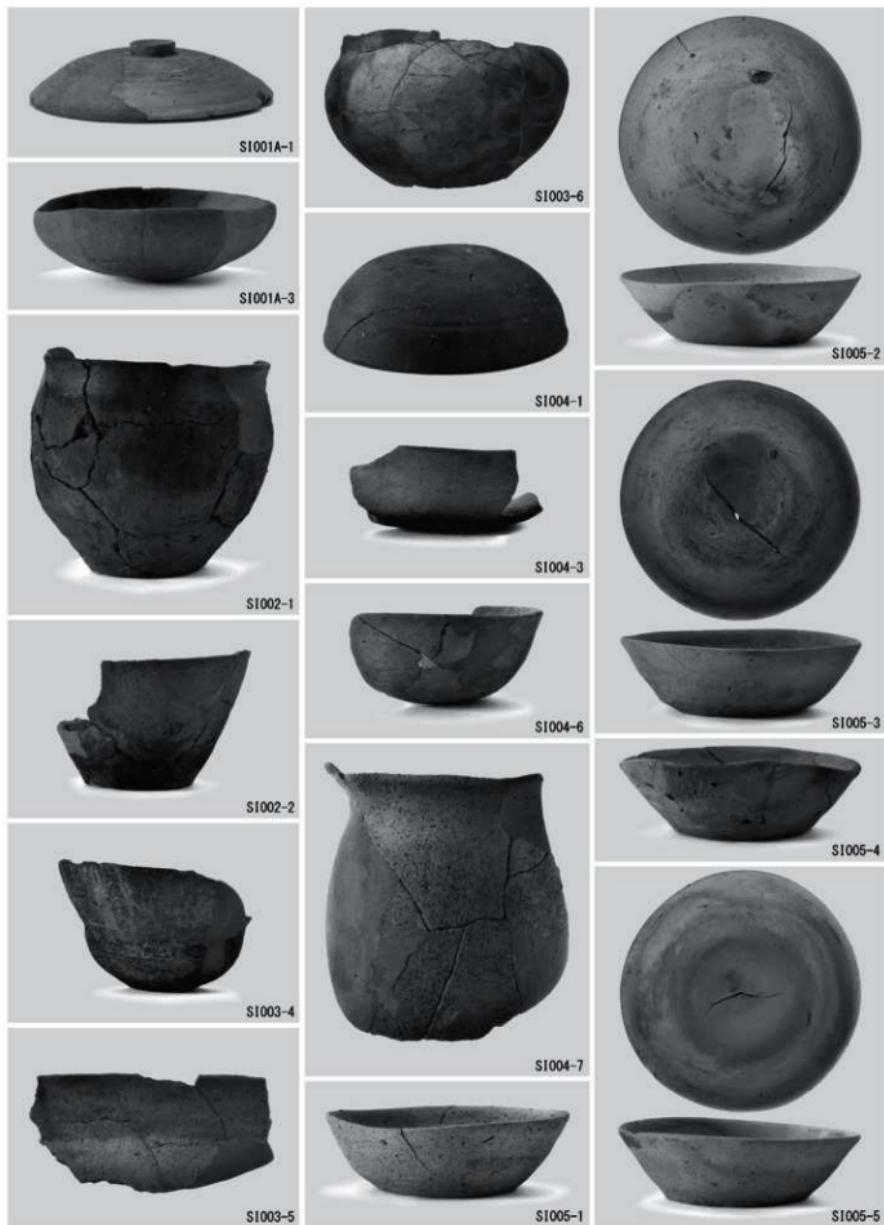


縄文時代石器



弥生時代～古墳時代土器

図版 11



古墳時代～平安時代遺構出土土器（1）

図版 12



古墳時代～平安時代遺構出土土器（2）

図版 13



古墳時代～平安時代遺構出土土器（3）

図版 14



古墳時代～平安時代遺構出土土器（4）

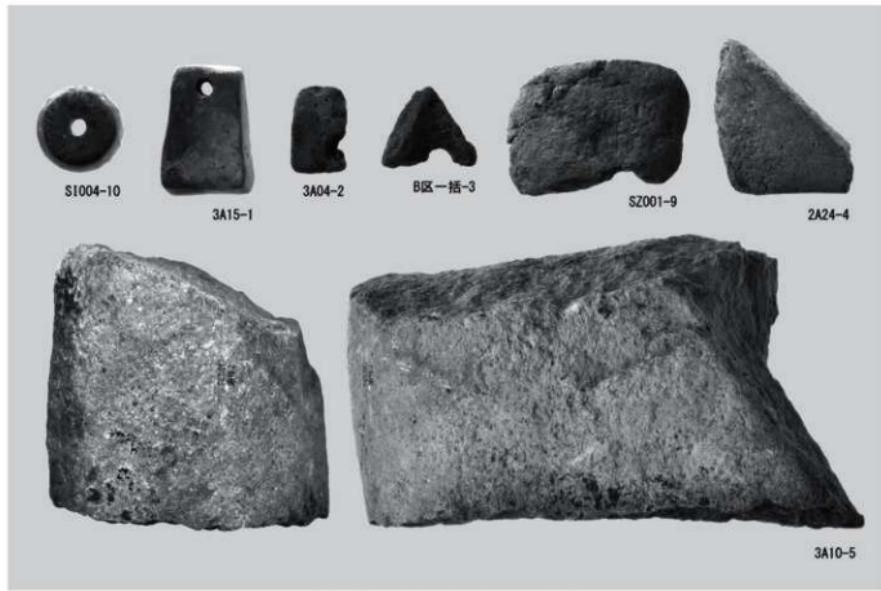
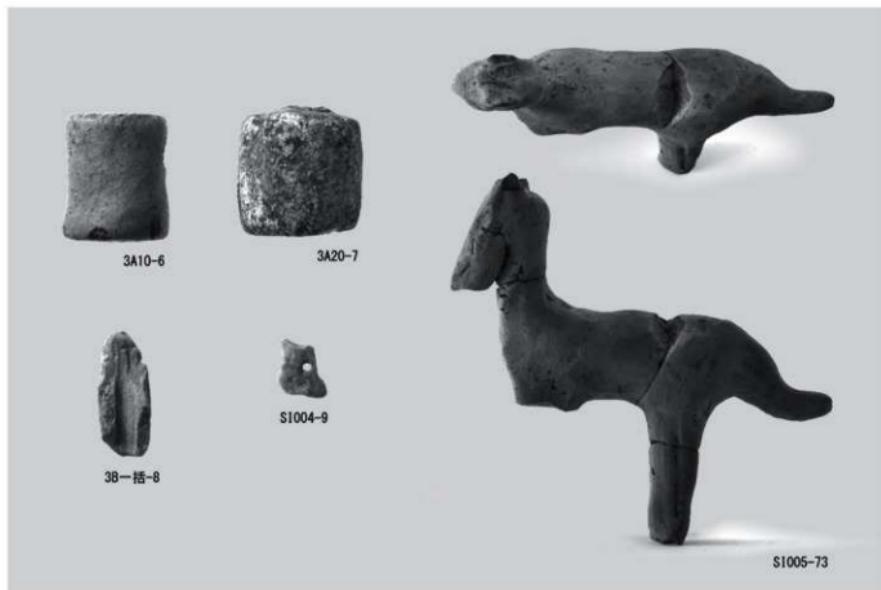


古墳時代～平安時代遺構（5）・グリッド出土土器（1）

図版 16



古墳時代～平安時代遺構・グリッド出土土器 (2)



古墳時代～平安時代土製品・石製品

報告書抄録

千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告第 27 集

南房総市岡町遺跡

— 広域営農団地農道整備事業（安房 2 期地区）埋蔵文化財発掘調査報告書 —

平成 30 年 3 月 28 日発行

編集・発行

千葉県教育委員会

千葉市中央区市場町 1-1

印 刷

株式会社白樺写真工芸

千葉市稲毛区山王町 102-5

